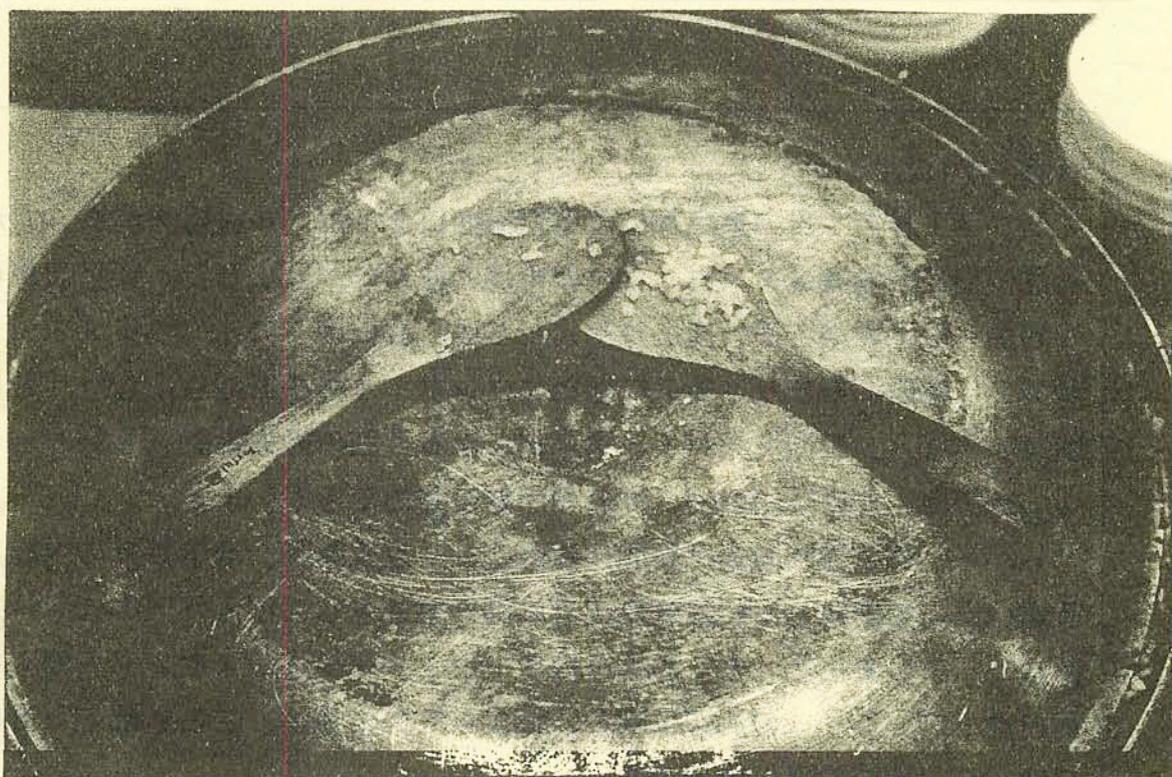


嵐は大樹をつくる

— '96 ~ '97 新宿越年越冬闘争の記録 —



新宿連絡会

発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議

《目次》

ページ		ページ	
2	越年闘争スケジュール表	19	「心をひらく輪」
3	越年越冬闘争の軌跡	21	さくら寮面会行動
7	炊き出し行動	22	新宿区への要求書
11	新宿パトロール	24	1・6福祉行動
13	広域パトロール	26	新宿でのピラ抜粋
14	救急対応	37	1・24集会記録
17	医療相談		

《まえがき》

96年1月24日の東京都による新宿西口ダンボール村撤去があつてから、新宿の野宿労働者はダンボール村の再建に取りかかりました。新宿駅から都庁に向かう地下通路を追い出された人たちは、西口地下のインフォメーション・センター周辺に集まり、そこに新たなダンボール村を形成しました。そして、新たな「住人」を迎えながら、東京都による2回の撤去策動（8月と12月の「一斉清掃」）をはねのけ、仲間の団結を強めてきています。

しかし、都の強制撤去は民間の鉄道会社（京王新線、地下鉄丸の内線）による追い出しを誘発し、新宿駅周辺では雨や寒さをしのげる地下のスペースは半減してしまいました。多くの人々はインフォメーション・センター周辺を含む西口地下ロータリーの周辺に現在、集まっていますが、ここも地下とはいえ風の吹きこむ比較的寒い場所です。

今回で第3回目となる新宿の越年越冬闘争は、こうした厳しい状況の中、「仲間の命は仲間で守る」をスローガンに開始されました。特に役所が閉鎖する越年期（12/28～1/6朝）には、連日の炊き出し、パトロールなど様々な取り組みが、新宿の野宿を強いられている当事者を中心に行われました。

この小冊子は、この新宿越年越冬闘争の取り組みを広く伝えるために編纂されたものです。新宿の野宿労働者の生き抜くための「闘い」に是非、ご理解とご協力をお願いいたします。

96-97第3回新宿越年闘争スケジュール表

(新宿でどげりより)

<p>12月28日(土)</p> <p>突入集会 PM6:00インフォメ前広場</p> <p>炊き出し PM7:00 インフォメ前広場</p> <p>渋谷パト出発 PM7:30本部より</p> <p>新宿パト出発 PM9:00本部より</p> <p>深夜1:00 "</p>	<p>1月 2日(木)</p> <p>炊き出し行動AM7:00 本部より</p> <p>会場準備作業AM12:30 から</p> <p>炊き出し PM1:00 インフォメ前広場</p> <p>餅つき大会 新春出し物も予定</p> <p>PM2:00からインフォメ前広場</p> <p>新宿パト出発PM9:00本部より</p> <p>深夜1:00 "</p> <p>夜のテマヤ おひきり PM6:00~</p>
<p>12月29日(日)</p> <p>炊き出し行動 AM11:30 本部より</p> <p>会場準備作業 PM5:30から</p> <p>馬場・広域パトPM6:00 本部より</p> <p>炊き出し PM7:00 インフォメ前広場</p> <p>音楽会 PM9:00までインフォメ前広場</p> <p>新宿パト出発 PM9:00本部より</p> <p>深夜1:00 "</p>	<p>1月 3日(金)</p> <p>炊き出し行動 AM11:30 本部より</p> <p>会場準備作業 PM5:30から</p> <p>炊き出し PM7:00 インフォメ前広場</p> <p>馬場・広域パトPM6:00本部より</p> <p>新宿パト出発 PM9:00 "</p> <p>深夜1:00 "</p> <p>※炊き出しは 夜に変更はなし。 この日は秋葉原は来ません。</p>
<p>12月30日(月)</p> <p>炊き出し行動 AM11:30 本部より</p> <p>会場準備作業 PM5:30から</p> <p>炊き出し PM7:00 インフォメ前広場</p> <p>池袋パト出発 PM8:00本部より</p> <p>新宿パト出発 PM9:00本部より</p> <p>深夜1:00 "</p>	<p>1月 4日(土)</p> <p>炊き出し行動 AM7:00 本部より</p> <p>会場準備作業AM12:30 から</p> <p>炊き出し PM1:00 インフォメ前</p> <p>池袋パト出発PM8:00本部より</p> <p>新宿パト出発PM9:00 "</p> <p>深夜1:00 "</p> <p>夜のテマヤ おひきり PM6:00~</p>
<p>12月31日(火)</p> <p>炊き出し行動 AM11:30 本部より</p> <p>さくら寮面会行動PM 1:00 "</p> <p>会場準備作業</p> <p>炊き出し PM7:00 インフォメ前広場</p> <p>カラオケ大会・紅白上映・新春乾杯</p> <p>0:30までインフォメ前広場</p> <p>渋谷越年祭り出発PM7:30本部より</p> <p>新宿パト出発 PM9:00本部より</p> <p>深夜1:00 "</p>	<p>1月 5日(日)</p> <p>炊き出し行動 AM11:30 本部より</p> <p>さくら寮面会行動PM 1:00 "</p> <p>会場準備作業 PM5:30から</p> <p>炊き出し PM7:00 インフォメ前広場</p> <p>医療相談会 PM9:00までインフォメ前</p> <p>新宿パト出発PM9:00本部より</p> <p>深夜1:00 "</p>
<p>1月 1日(水)</p> <p>炊き出し行動 AM11:30 本部より</p> <p>会場準備作業 PM5:30から</p> <p>馬場・広域パトPM6:00 本部より</p> <p>炊き出し PM7:00 インフォメ前広場</p> <p>新春映画会 *寅さんシリーズ予定</p> <p>PM9:00までインフォメ前広場</p> <p>新宿パト出発 PM9:00本部より</p> <p>深夜1:00 "</p>	<p>1月 6日(月) 新宿福祉行動</p> <p>AM8:30 インフォメ前広場集合出発</p> <p>本部撤収 昼から</p> <p>集約 夕方</p>

ハウスがない仲間への集中アオカン体制は毎晩夜10:00頃から朝6時まで
本部は24時間体制 物資・毛布などは本部周辺に集積、何かあったら本部まで!
新宿パトは9時が3班体制、深夜1時は1班体制。
企画は追加変更の予定あり。

☆連日夜、ビラを配ります。
予定表はビラに面日のせまるので
確認の上、結果を!



'96~'97 越年越冬闘争の軌跡

12月

- 1日 越年越冬闘争突入集会（西口地下インフォメーションセンターにて）
- 6日 「動く歩道」関連工事の費用約14億円は違法・不法だとしてダンボール村住民、支援者、自治体労働者ら70人が住民監査請求を起す。
- 8日 学習会「冬を乗り越えるとはどういうことか」（日本キリスト教会館）
約40人が参加。川崎水曜パトロールの会の水嶋陽さんをゲストに迎え、行政の言う「自立」＝「社会復帰」と野宿の仲間が実践している「自立」とは違うという話など、議論が盛り上がる。
- 10日 新宿東口の環境美化キャンペーンに合わせ、西口地下を自主清掃する。

12～14日 東京都第三建設事務所（三建）が8月に続き西口地下を全面清掃。新宿連絡会は、三建と事前交渉を行い、「強制手段はとらない」などの約束をとりつける。

清掃1日目は両者協力し、清掃を行うが、2日目、三建がダンボールハウスの一部に対して強行に移動を主張。警官隊が登場すると、「強制的手段をとるぞ」などと約束を反故にする発言を繰り返す。結局、実力行使はさせなかったが、三建の不誠実さが際立った「清掃」であった。

19日 「動く歩道」監査請求のうち、ダンボール村住民の分が「住民票がない」との理由により却下される。却下通知はダンボール村の郵便の郵便ポストに届けられた。

19日 都と区による「冬期臨時宿泊施設」である「さくら寮」（新宿・内藤町、定員約90人）が開寮。

23日 越年越冬闘争支援連帯集会（セントラルプラザ）約150人が参加。歌と討論を中心とした集い。

25日 三建と新宿署が越年前のこの時期にわざわざ新たな警告板を「動く歩道」入口に設置。

新宿東口のキャンペーン知り「美化に協力」

ホームレスたちが 地下広場自主清掃

空き缶やたばこの「ポイ捨て禁止条例」を制定した新宿区の新宿駅東口周辺で10日、「ごみを捨てないで」と呼び掛ける路上清掃キャンペーンが行われた。これを知った西口のホームレスたちが、段ボールを並べている地下広場を自主的に清掃した。題して「ホームレスを見捨てないデー」。

清掃キャンペーンは、来年4月施行のこの条例のPRを兼ねて、区が地元商店街や警察などに呼び掛けた。「私たちが患者にしない」という空き缶や吸い殻の「叫び」を標語に「新宿一斉美化作戦・今日から私を捨てないデー」と銘打った。東口周辺や歌舞伎町の歩道を清掃、ビラや放置自転車を撤去した。この企画を事前に知ったホームレスらが、区環境部

午後1時、西口地下のインフォメーションセンター前に集まったホームレスら十数人が、広場のごみを掃いた。さらに洗剤液を使って路上のタイヤを磨いた。「通行風が多いからまたす

に「自分たちが自主的に西口を清掃したい」と申し出た。区は了承、西と東でそれぞれの清掃作業に取り組んだ。広場では毎週土曜日の朝、ホームレスと支援者らで周辺のごみ拾いを行っているが、夜間は、段ボールの中に火をついたばくちを投げ込んでいく人や立ち小便をして行く酔客もいるという。通りがかった都内の男性(38)は「このパワーを生かし、行政が清掃作業などの仕事を割り振って、給料を払うようなことはできないんですかね」と話した。

【磯崎 由美】

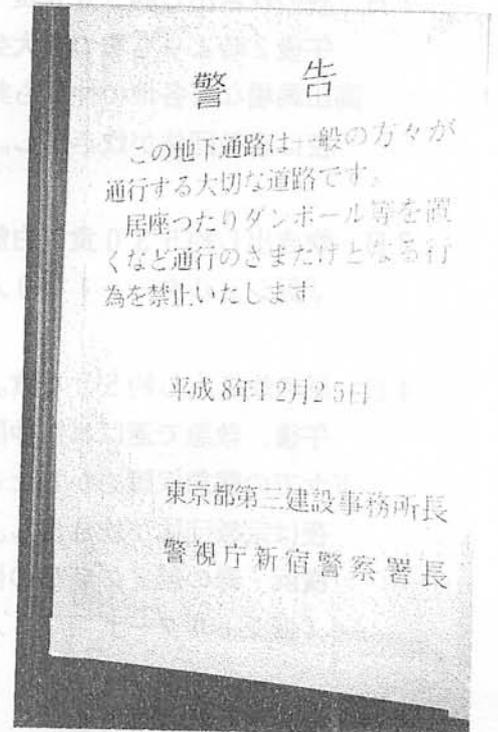
12月

28日 越年闘争突入を宣言。炊き出しは約400食（白飯とクリームシチュー）

三建は「動く歩道」防衛のためかガードマンを動員し、歩道入口にピケを張る。

本部設営を始めると機動隊が導入され、設営を妨害。三建副所長・山口は「お前らの強制排除などいつでもやってやる」と暴言を吐く。

三建、警察に対し、多数の仲間が抗議。本部設営をやり抜き、防衛する。



29日 炊き出し約450食（炊きこみご飯と鶏がらスープ）

炊き出し後、インフォメーションセンター前で越年ライブ。朴保さんら4組の演奏で大いに盛り上がる。新宿西口地下での本格的なライブは「フォークゲリラ」以来という説も。

この日からインフォメーションセンター前にブルーシートやダンボールで仮囲いをした「仮シェルター」を開設。この日は40人が利用。本部横のスペースは「医療テント」として利用。病人はこちらで寝てもらおう。

30日 炊き出し約430食（白飯と赤味噌煮込み）。

炊き出し後、「医療講習会」。講師は置かず、梅醤番茶を飲みながら、風邪や高血圧、結核など病気と健康についての話をそれぞれの経験に基づいて話し合う。約70人が参加。

「仮シェルター」は68人。

31日 さくら寮面会行動

炊き出し約430食（白飯と鶏がらスープ）。

毎年恒例のカラオケ大会、紅白歌合戦鑑賞、新年乾杯。200人以上の仲間が共に新年を迎える。あちこちで「あけましておめでとう」の声。

「仮シェルター」は73人。

1月

1日 炊き出し約540食（白飯と煮込み）。

新年映画会「男はつらいよ」第1作。やはり映画は寅さんが一番人気がある。

「仮シェルター」85人。年末をサウナなどで過ごしていた人などが持ち金が尽き、路上に押し出されてきている模様。

2日 昼の炊き出し約500食（カレー）。

午後2時よりもちつき大会。ダンボールの獅子舞も登場。今はさくら寮などの施設にいる仲間や高田馬場など各地の仲間も集まり、大盛況。本部に差し入れられた肉まん、あんまんも配られる。

夜は宗教団体が炊き出し。「仮シェルター」は113人と増加する。

3日 炊き出し約530食（白飯に漬物）。

「仮シェルター」130人。

4日 昼の炊き出し約500食。

午後、救急で運ばれた仲間2人が入院に至らなかったため、区役所の宿直に連絡。福祉を通じ、ドヤでの緊急保護をかちとる。

夜は宗教団体が炊き出し。

横浜・寿の越冬に新宿の仲間3名が参加。ビデオ集会でアピール。

「仮シェルター」112人。

5日 炊き出し約530食。

炊き出し後、ボランティアの医師による医療相談。医師6人に対し、53人が相談を受ける。

「仮シェルター」130人。夜間はこの冬、最高の寒さを記録する。

6日 福祉行動に39人が参加。

夕方、本部を撤収。本部跡地にてささやかな打ち上げを行う。

仲間の提案により、小屋のない仲間のためにダンボールハウスが作られる。

16日 「冬期臨時宿泊施設」の「なぎさ寮」が開寮。

22日 「動く歩道」住民監査請求の口頭陳述が都庁内で行われる。

24日 1・24強制撤去から一周年。都庁への抗議ビラまき。

夜は「ダンボール村のめざす未来」と題した集会が行われる（早稲田奉仕園小ホール。約80人が参加）。

2月

3日 東京都監査委員会は「動く歩道」監査請求を棄却。

越年越冬闘争は3月まで継続される。

◇インフォメーション・センター前の「仮シェルター」と炊き出し風景



(Photo by S.O.)



(Photo by H.H.)



(Photo by S.O.)

大騒ぎしながらの炊き出し作業

越年期の炊き出しは、12月28日から1月5日までの9日間、毎日行われました。

毎日の炊き出しを実現するための行動が炊き出し行動です。何しろ1回に500食以上を準備するのですから、ガスや炊飯器を使っては間に合いません。大きなカマドに鍋をかけ、直火で炊き上げるしかなく、そのような大がかりな装置と『路上での火の使用』が可能な点で、必然的に山谷での作業ということになります。

炊き出し行動は午前11時半に集合し、山手線の上野回りでゆっくりと山谷に向かいます。途中で駅のごみ箱の中から、新聞紙や雑誌などの焚き付け用の紙類を拾っていきます。

越年期間中は、どうしても夜の行動が軸となるため、昼は炊き出し行動に多くの仲間が参加しました。事前の打ち合わせでは、「パトロール隊と炊き出し隊はメンバーを分けて無理のないようにしましょう」としていたのですが、結局多くの仲間が炊き出しからパトロールまでぶっ続けの毎日をやり切るかたちとなりました。

山谷越年闘争の拠点であるセンター前に到着すると、ちょうど山谷の昼飯の時間にあたります。ここでまず腹ごしらえをしてから、全体で打ち合わせ、その日のメニューを決めて段取りに入ります。「越年期間中くらいは、普段と違ったものを準備しよう」という仲間の総意で手の込んだメニューとなり、初日はクリームシチュー、2日目は牛モツの煮込みといった具合で進められました。現場では狭い敷地で新宿と山谷の仲間総勢40名程の仲間がひしめきあって作業をするので、大変騒がしく訳が分からなくなる事もよくありました。

作業は大きく①鍋洗い、米とぎ、カップ洗い、野菜洗いの水作業と、②野菜や肉の切り込み作業、③薪にする残材を作るパレットばらしに分けられ

ます。しかし、全体を見回して段取りを指示する者が不明確なため、いらない野菜をきってしまったたり、米の釜数が違ったりで、大騒動はいつものこと。

そんな中でも、参加した全ての仲間たちが自分の任務を自分で決め、ああしろこうしろと誰かに言われなくても、能動的に作業に参加できたのは、非常に良かったと思います。

2日目の牛モツの煮込みは大変味も良く、仲間たちには大好評でした。しかし直径60センチくらいの寸胴鍋2杯を準備しても、仲間全体に十分に行き渡るだけの量はとてもありません。熟考の末、紙コップ1杯ずつを分けたのですが、飯を配るだけでも多少混乱するのに、それに座りの悪いコップがつくと、混乱に拍車をかけてしまい、さらにモツが旨いとなると、これはもう奪い合いになってしまいます。連絡会に参加する労働者たちが、仲間にやさしく声をかけるのではなく、それこそ怒鳴り合いの修羅場が現出してしまいました。「これはまずい」—仲間たちがこう思ったのも無理のないことでした。

連絡会の炊き出しと山谷の共同炊事

ここで連絡会の炊き出しのあり方についてが問われました。新宿では94年2月17日の大規模な強制排除の直後から大衆的な運動が始められましたが、当初から炊き出しを行動の軸としてきたわけではありません。

94年当時、私たちは山谷と渋谷・原宿からそれぞれ独自のスタンスで新宿へと足を踏みいれました。そこで発見したものは、「仲間が共同性の中で食・住の問題を独自に解決している」という現実でした。エサを拾い、仲間と分け合い、また仕事に行った仲間は食えない仲間の分を補っていく—行政から放置されたばかりか、運動からも



(Photo by H.H.)

見捨てられてきた労働者の、この見事なまでの能動性は、当時の私たちには大変衝撃的でした。また同時にこの「生きていく力」にこそ光を当て、連絡会運動はこの「力」を伸ばしていくことに力点を置いてきたつもりです。

94年12月、最初の越冬闘争の突入と同時に、私たちは毎週日曜日の定例炊き出しを始めました。「炊き出しを仲間自身の力で組織しよう」——こうして、炊き出し行動が定着していったのです。

さらに炊き出し開始と共に、「仲間の蹴倒し合い、奪い合いをなくそう」というのももう1つの主要なテーマでした。野宿を余儀なくされた労働者たちは、行政によって行列を作らされ、早い者勝ちで我先へと殺到する関係性を強いられてきました。「飯くらい、皆なで座ってゆっくりと食いたいなあ」——仲間たちの中にあるこんな当然の欲求に応えるために、私たちは午後7時の一斉配食というやり方を始めたのです。

「ますい飯と長い説教がセット」になった炊き出しほど、私たちの諸関係を貧困にさせるものは

ありません。『一緒につくって一緒に食べる』——山谷で94年以降続けられてきた共同炊事のありかたから、労働者の共同性を発揮できる方法を取り入れたというのが、今の炊き出しのやり方なのです。

上記のような連絡会の炊き出しのテーマに照らして、越年期間の「奪い合いと混乱」が大きなマイナス点であったことは否めません。

メニューを簡素化、原点を追求する炊き出し
越年3日目以降は思い切ってメニューを簡単にし、混乱を最大限無くすようにつとめました。カレーライスや煮物の丼かけ、鶏肉とキャベツの味噌炒め丼かけなど、手間はかかるが配食の簡単なものにしました。それでも正月らしく、元旦には煮しめとナマスなど工夫をこらしてきました。

こうして何とか越年期間はしのご事が出来ましたが、残られた課題もあります。

何よりも、「一緒に作って一緒に食う」関係にならず、「一部の決まった仲間たちが作って皆な

が食う」関係に止まっている事です。これが仲間の間では「他の連中は食うだけで何の手伝いもしない」という苦情として噴出してしまふ現状が厳として存在しています。越年期間には、連日5名程の新しい労働者の参加があった事は画期的でしたが、新宿総体として捉えた場合には、全体に広がっていく普遍性をまだ持ち得ていないと考えます。

この点については、声を掛け合い誘い合う事から、新しい仲間の参加に結びつけていかねばならないでしょう。

炊き出しで食の問題は解決しないが、

それでもやっぱり必要です

越年期間は毎日1食、通年的には1週間に1回、通年的には1週間に1回、炊き出しそのものの力はこれだけしかありません。当然ながら、これだけの食料で人間が生き延びていけるわけではありません。

仲間たちは普段、自分たちの力で食料を確保しています。しかしコンスタントに確実に食糧が手に入る保障はどこにもありません。

その時に、「ああ日曜日になれば白い飯が食える、最悪の場合それまで我慢だ」という最後の拠り所になればそれでいいのだと私は考えています。だから連絡会の炊き出しは絶対に休む事は出来ないし、必ず丼飯1杯を保障しなくてはならないと思います。

新宿と山谷の二拠点越冬として取り組まれた今回の越年闘争は、炊き出し行動の中で確実に拠点間の団結を強めました。

「飯と寝床をおねだりする運動」と、我々の闘いに唾を吐きかける山谷の分裂主義グループには労働者の主体的な運動の意義のかけらも分からないでしょう。

まあとにかく長い闘いでしたが、仲間たちどうもお疲れさまでした。



(Photo by H.H.)

「自分は何ができることをやるだけ」炊き出し班・内藤さんインタビュー

越年期に限らず、新宿の炊き出し行動のいつも中心でがんばっているダンボール村の内藤さんにインタビューしました。

◇越年の炊き出しで苦労した点は何ですか？

片っ端からあるけど、肝心な時に人がそろわなかったことかな。盛りつけとか、洗い物の時とか。山谷の方は何だかんだ向こうの人たちが協力してくれたんだけど、新宿に来てからが…。

◇普段の炊き出しと違う点がありましたか？

余裕がなかった。いつもの炊き出しだとその日を刻んだり、米といだりすると、後は炊いちゃえばいいんだけど、越年中は次の日の野菜刻んだり、というように下ごしらえをしとかないと。

◇体はもちましたか？

うん。なんでオレがバト行かないかっていうとそれがあるから。それに夜はインフォメ前（集中アオカン）の準備もあるんで、みんなバト行っちゃうと困るから。

自分ができることやってると疲れはしないよ。段取りがわかってるから。山谷の方である程度やってくれてるしね。

◇新宿の炊き出しにはいつから参加していますか？

昨年の3月14日、大井（なぎさ寮）出てから、だいたい出てるね。出ないというのは少ないね。自分が病気の時と、（まわりの仲間から）たまにはアレしろと言われた時くらい。

◇昔、そういう仕事をやってたんですね。

若い頃、22歳から5年くらいやったのかな。板前。割烹旅館にいたから。駅弁もやった。売り子で入って、朝、弁当つめるのに人が少ないから「手伝え」って言われて、そのうちオヤジに「調理場入れ」って言われて。板前になるつもりはなかったけど、そのうちおもしろくなって始めたんだよ。

◇他の仲間に言いたいことは？

それはあるさ。でも人は人、自分は自分。人が何しようとして自分ができることをやる。できないことをやれってたって、わからないんだから。自分のできることをやるということ。みんなそういう気持ちを持ってくれればいいのだけど。



新宿パトロール

【越年期・新宿パトロール記録】 * 31日は大勢の人たちが紅白歌合戦を鑑賞していたため、概数。

	28日	29日	30日	31日	1日	2日	3日	4日	5日
地下	335	410	403	*420	485	488	505	465	419
西口	83	89	65	82	96	96	87	90	91
東口	43	42	59	50	77	84	89	74	75
合計	461	541	527	*552	658	668	681	629	585
深夜	380	458	544	438	487	612	609	518	554

※越年期のパトロールは毎日午後9時から（計3班）と、午前1時から（地下のみ1班）の2回行われました。表の「地下」は西口地下、「西口」は西口地上、「東口」は東口地上（南口周辺を含む）のそれぞれ9時からのパトロールで出会った人数です。「深夜」は午前1時からの西口地下のみの人数です。

西口地下班 — 仲間のことは仲間に聴け — 稲葉 剛

越年期の西口地下のパトロールは、午後9時からと午前1時からの1日2回、行われました。都による強制撤去以降、それに便乗する形で民間鉄道会社が追い出しを行い、京王新線や丸の内線の駅構内から次々と野宿労働者が締め出されていきました。その結果、地下コースの距離は短縮され、最近では西口地下ロータリー周辺のみとなりました。

しかし越年2日目（12月29日）、ダンボール村のSさんが丸の内線の先の「新宿3丁目」の駅あたりに仲間がいるという情報を教えてくれ、行ってみると20人以上の仲間に会うことができました。やはり仲間のことは仲間が一番知っている、という新宿パトの原点を学んだような気がしました。一方でその行き帰りの途中、丸の内線の構内でガードマンが追い出しを行っている現場に遭遇し、介入して止めさせるということもありました。他の班でも、ガードマンが仲間に蹴りを入

れようとしているところにちょうど通りがかり、向こうがこちらに気づいて宙に浮かせた足を下ろす、ということもあったそうです。

深夜のパトではダンボールも毛布もない仲間に多く出会いました。使い捨てカイロや毛布、防寒着などを配る一方、2日目からインフォメーションセンター前に開設した「仮シェルター」（ブルーシートなどで風よけを作り、中で毛布を支給して寝てもらう）に多くの人を誘導しました。この「集中アオカン」は最大時130人にも膨れ上がりました。また具合の悪い仲間は、とりあえず本部横に作った医療テントで休養してもらい、病状によってその後の対応を決めました。

地下は人数も多いため、聞き込みなど不十分な点もありましたが、最低限、本部を中心とする活動とあちこちに散らばる仲間をつなぐ役割はできたと思います。

西口地上班 — エールを交換する場として — 星 将隆

西口のパトロールを通じて、最近変わったことが起こっていることに気づきます。いつも今まで私達が思ってきたガードマンの対応が、違うのです。

野宿せざるをえない人達にとって、ガードマンや通行人は、常に偏見や差別感を少なからず持っている、私達は考えてきました。

しかし、そのガードマンの対応が変わってきたのです。

—「この不況の状況下、困っている人がいるのならば、助け合うのは当然」—この工学院前のガードマンの対応は、ちょうどその時、風邪気味で寝こんでいたAさんの気持ちを、安心させました私達が西口地上をパトロールして、新しく野宿

をせざるをえなくて、やってきた人を見かけます。

「日常生活をキチンとやっているのに、通行人の落とすゴミのせいで困る」、そういった言葉を聞いたり、又「私は、新しく公園に生活をしに来た人に、注意しているんだ」 そう言う人もいました。

西口地上のパトロールを通じて、考えさせられたことがいろいろあります。

私達、パトロール班が、新しく加わった人も含めて、地上の生活している仲間の人から学んでいくこともその1つです。

西口地上の、野宿の人達との交流は、私達パトロール班が、影響を受けながらお互いエールの交換を作る場だと思います。

東口地上班 — 能書きなしの闘い — 五十嵐 真紀

新宿3丁目、歌舞伎町に及ぶ東口方面のパトロールで出会う仲間の半数は決まった寝床を持たない。終電まで歩き続け、駅が閉まると西口地下に降りてきて、きつとうずくまって休む。夜通しまよい歩き、昼間公園などで寝ているという人もいます。96年1月24日以降、都にならった陰湿な撤去や暴力は各地で激増し、仲間の居場所はますます奪われていった。年が明けると冷え込みは厳しさを増し、越冬を更に過酷なものにさせる。

新宿地上に寝床を持つ仲間の大半は、每晚ダンボールで囲いを作り、翌朝それを畳む生活をしている。「ここ？ うるさくないよ。毎朝きれいに掃除していくもの。ビルの人にも了解をとってるし。散らかさないとか、人に迷惑かけないとか、最低限のことはやってるから誰も文句言わないよ」彼らは口をそろえてそう言う。隣で寝ている人をちゃんと知っている。二人、三人の少人数であっても、彼らは自分たちのコミュニティを築き、支えあって生きている。商店やガードマンとも関係をつくり、自分の寝床を守っている。どれもがそこで生きていくための大切な要素だから、越冬期、

相方が寮や病院へ入ってしまったらすると、もう片方もその場を離れてしまうということもある。

越年前のことだった。警備のやかましいJR東口でダンボールの寝床を作っている仲間に出会った。ガードマンはうるさくないのかと尋ねると、彼は声を震わせてこう言った。「仕事もなくて、足が悪いから福祉に行ったんです。そしたら今は（施設には）入られないから野宿してくれと言われて。ここで寝てるとガードマンが他へ行けという。どこに行けというんだ！ 俺は福祉からこう言われて野宿してるんだ！ってガードマンに言ってやったんですよ。それから何も言ってこなくなって、通行人の嫌がらせがあった時には助けにきれくれたこともあった。」以来、東口には体を休める人の姿が増えた。彼の怒りが勝ち取った空間だと思った。

「地上はずっと厳しい」西口ダンボール村に住む仲間はずぶやく。そこには、小さいながらも“村”があり、ひとりひとり震えるような怒りをかかえながら、居場所を守る闘い、命を守る闘いを能書きなしに実践している仲間の姿がある。

広域パトロール

新宿連絡会では毎週1回、同じ新宿区内の高田馬場の仲間と結びつくため、高田馬場パトロールをおこなっていますが、越年期は広域パトロールとして高田馬場の他、渋谷、池袋も回りました。以下はその記録です。

◇12月28日・渋谷

「渋谷・冬をのりきろう実行委員会」が109地下1階でおこなっている渋谷の仲間の寄り合いに新宿からも合流。その後のパトロールにも参加し、計59人の仲間に出会う。

◇12月29日・高田馬場

西戸山公園で4人に会い、戸山公園では68のテントを確認。テントは不在のところが多かったのであまり話はできなかった。

◇12月30日・池袋

東と西に2班に分かれ、計80人の仲間と出会う。地下道でガードマンに暴行を受けた仲間と出会う。救急要請が1件。59歳の仲間、衰弱して腹痛を訴える。

◇12月31日・渋谷

宮下公園で行われる、毎年恒例の「渋谷・越年越冬まつり」に新宿の仲間も数名合流。映画会やカラオケ、もちつきなどを共に楽しむ。

◇1月1日・高田馬場

前回同様、西戸山公園4、戸山公園68。元旦のせいか公園は非常に静か。体育館の回りに22人。

明日午後の新宿でのもちつき大会参加を呼びかける

◇1月3日・高田馬場

西戸山公園5、戸山公園68、体育館周辺が増えて39人。昨日のもちつき大会に参加した仲間数人と話す。

また外苑の東京体育館、国立競技場前、明治公園にも足を伸ばし、計26人の仲間に出会う。73歳の仲間が野宿していたので、5日の医療相談のことや福祉のことを伝える。

◇1月4日・池袋

東口や駅周辺、西口で総計89人の仲間と出会う。前回聞き取った池袋駅の暴力ガードマンの被害者2人と話ができる。1月1日にもこのガードマンによって仲間が負傷したとの噂があった。

12月に西口公園で寝ていた仲間が雨の日に凍死したという話を聞く。無念追悼。

新宿連絡会では越年後も高田馬場への広域パトロールを継続しています。各地の仲間は新宿のように集まって野宿できる条件がなく、より厳しい野宿生活を強いられています。今後とも新宿だけでなく、各地の仲間とも連携していきたいと思います。

救急対応 -かちとったドヤ緊急保護-

安江鈴子

新宿福祉事務所は具合の悪いなかまに生活保護の医療単給を行っている。具合の悪いなかまは生活福祉課を訪れ、病状を説明して指定された病院（国立国際医療センター、社会保険中央病院、都立大久保病院、新宿病院など）の該当科を受診する。医師が記入した病状報告を福祉事務所の持ち帰ってそれをもとにケースワーカーと相談するわけだが、1回だけの受診の場合も多いし、何回か通院することになっても、野宿のまま病院に毎週1回なり、月2回なり通うというもの。高齢（といっても五十歳代だが）のなかまで腰痛などを抱える人も多いが、温めたり牽引したりしに毎日通える整形外科の病院などに行くように言われることはまずない。

笹島の日雇労働者、林勝義さんはこの決定（医療扶助のみで生活扶助を行わなかった）が違法であるとして、決定の取消しと損害賠償を求めて提訴したわけだ。（一審の名古屋地裁は林さんの全面勝訴。名古屋市側は控訴。）

また、入院にならなかつた場合（医学的判断や一次から三次までどういう性格の医療機関であるか、またベッドの都合などもある。しかし、なかまにとっては、野宿で、しかもエサ捜しも自分でしなければならぬ状況では自宅療養どころではない）、区内の簡易宿所（ドヤ）などに法外援護で入ることもある。現金は支給されず、すべて現物支給（宿泊と食事）である。

越年中は福祉事務所はもちろん閉まっているので、こういうなかまのことが気がかりだった。12月に入って福祉事務所の係長に交渉した結果、越年中は待機職員がおり、ドヤなどの枠も確保してあることがわかった。

・Nさんの場合

年末に飯場を出て新宿へ来たが「胃が痛い」と

のこと。2日間、本部脇の病人用スペースで寝てもらうが吐き気やめまいがおさまらない。救急車を呼んで都立大久保病院へ搬送される。救急処置室で診てもらうが、胃カメラなどは予約制で、その場では診断がつかない。栄養点滴をしてもらっている間に福祉事務所のその日の待機職員に連絡を取り、ドヤに1月6日の朝まで泊まれることになった。

・Kさんの場合

夜9時の地下パトロールで出会う。右足がひざから下、腫れている。触ってみると熱をもっている。歩くのが少し困難とのこと。その夜、本部脇で寝てもらい、翌朝、救急車を呼ぶ。救急隊員は左足の方も押してみてもくんでいるので「以前の糖尿病が再発したのかもしれない。」との判断。しかし、搬送された病院で検査の結果、血糖値は正常で入院の必要はないと医師が診断。歩けるようになるまで泊る場所も必要だと、やはり新宿福祉に連絡をし、ドヤの枠をとった。

Kさんのドヤが決まった時点で「病院のためのドヤの枠はおしまい。高齢者のためのものならまだ空いている」という情報であった。高齢のなかまもインフォメ前にいたが、「越年明けの1月6日に福祉行動をする」という意思を尊重して、その枠は使わなかった。

NさんもKさんも1月6日の福祉行動にそれぞれのドヤから参加し、Nさんはさくら寮入寮、Kさんは引き続きドヤに泊まれることになった。

今回のドヤ緊急保護は、今まで役所が閉まっている間は何もしてこなかった福祉事務所を動かしたという点で、ささやかな成果と言える。

「こちら消防庁。火事ですか、救急ですか？」
公衆電話の受話器から、無機質な声のこの問い掛けを聞くのも、慣れっこになってしまいました。96年の8月半ばからダンボール村に入村した私は、当初は活動なんか生まれて初めてのことから、村の仲間が立て続けに野垂れ死にを強いられ、パトロールのビラに非常事態宣言が出されるに到りました。4人目のSさんの時のことは、ショックが強すぎたのか、未だに良く覚えています。JRの改札口の前で越年カンパをするので、仲間が机出しのところに集まっているところに、あまり活動に参加しないスバルビル側の仲間の1人が「近くの小屋のSさんが、もう3日も小屋から一步も出てこないんですが」

と言ってきました。そのとき活動家のYさんと、Fさんの2人が来ていたので、2人がその仲間からSさんのことを聴き取り始めました。

「小屋のなかで寝ていて、声をかけても返事をしない」

「調子悪かって近頃言ってたから、エサとりした飯を差し入れたんだけど、全然食べてない」
仲間の言葉からかなりやばいと感じ、Yさん、Fさん、私の3人がSさんの小屋に急行しました。

「Sさん！Sさん！大丈夫ですか！？返事してください！Sさん！」

寝ている姿が見えるので呼びかけても、返事がありません。「もしかして耳が遠かったっけ」と思いながら、更にでっかい声で呼びかけたのですが、何の応答もないのです。

「まぶたが動いているようだし、唸り声が聞こえるようよ」

小屋のなかに顔をつっ込んでいたYさんの言葉と、近くに立っていた仲間の

「Sさんは前に肝臓が悪かって言っていました。確か、肝硬変って言っていました」

との言葉を聞いて、私の頭のなかには、10年以上前に勉強した内容がよみがえってきました。

“肝不全に伴う肝性脳症”という言葉です。それともう一つの言葉“肝性脳症による昏睡に陥った場合、意識不明のまま死に到るケースがほとんどである”です。

「救急車呼んだほうがいいかな？」

Fさんのつぶやきを耳にして私は、すぐ答えを返しました。

「呼びます」

公衆電話から119番して、出た相手の言葉はもちろん、冒頭のあのせりふである。状況を説明して電話を切り、5分ほど待つとサイレンを鳴らして救急車がやってきました。

「とにかく小屋から外へ出してもらえますか？私等がやって小屋を壊したりしたら、何を後から言われるか心配ですから」

救急隊のH隊長の言葉があり、Fさんと私がSさんの小屋に入り、結局小屋の入口を壊して広げ、Sさんを運び出しました。

「添乗できますか？」

YさんがH隊長に尋ねました。慌ただしくSさんの小指にパルサーを繋ぎ、酸素マスクを顔に被せたりしながら、H隊長が答えました。

「んー、搬送中に心停止の恐れがあり、そのときは心臓マッサージなんだけど、この車古い型で狭いから添乗はちょっとさせられないねー。」

結局、Sさんのことを考えて添乗の追求を、それ以上しないことにしました。そして、それが生きているSさんと私等とのお別れとなりました。Sさんは翌日午前9時頃、亡くなりました。私等はSさんの小屋の前に行き、手を合わせてSさんのご冥福を祈りました。そして私はいろいろな活動のなかでも、特に医療の問題に重点を置いて活動に関わるようになりました。

◇ ◇ ◇

そして12月28日から1月5日までの9日間、区役所や病院が年末・年始の休暇に入り、要保護状態の仲間の利益を考え、4号街路近くに、越年越冬闘争本部を設置し、隣接して医療テントも設置しました。

ある夜のことです。パトロールを終えて私等が医療テントに戻ってくると、見知らぬ仲間が支援のIさんの手で包帯とガーゼの交換をしてもらっていました。その仲間Yさんは激しい咳をしながら、

「毎年冬になると、咳がひどくなるんですよ」

などと言っていました。野宿の仲間の中で肺結核が流行していること、A香港型とB型のインフルエンザが混合感染により大流行していることの2点を考え合わせて、体温・脈拍・血圧の測定と胸部の聴診を行いました。体温は38度5分、脈拍・血圧はほぼ正常値・右肺から雑音がしていることと、Yさんの語った、

「2年ほどまえに結核で入院していました」

という言葉から、風邪・インフルエンザ・肺炎・結核の再発などいろいろなケースが考えられ、医療テントの装備と人員ではYさんの状態を良化させることが難しいと思われるので、救急要請をしました。私はそのとき救急隊長の了解をえて、添乗することが出来ました。Yさんの場合、意識も清明でしたし、救急隊長の問い掛けに丁寧に、かつ出来るだけ正確に答えようと努力をしていました。もちろん医療従事者でないYさんが相手のことですから、救急隊長も一般的な表現を使っていますし、Yさんがとつとつと答える言葉を真剣

に聴き取っていました。とりあえず都立O病院に搬送されました。肺のレントゲンをとると右上肺野に放射線状に淡い影が写っています。都立O病院には結核患者用の病棟がないので、当直医の方が結核患者用の設備のある国立Kセンターの当直医の方に、電話連絡で受け入れを要請しますとOKが出たので、国立Kセンターに転送されました。Yさんは国立Kセンターで補足的な問診を受けた後、隔離病棟に入院となりました。

◇ ◇ ◇

私がこのケースで関わった救急隊の人も、病院の医師も、看護婦さんも、Yさんのいのちを守るために、プロとして真摯に働いていました。ホームレスとよばれいろいろな形の差別を日常的に受けていますが、医療の現場では同じ人間として当たり前の形で私等と接してくれる人がいることが、よくわかりました。Yさんのケースの後も何度か添乗していますが、差別的対応と思われるケースは一度だけで、そのときのSという救急隊員は救急隊のなかでも問題児だということもあり、他には一度もそういう態度をとられたことはありません。最近では偶然会うと、お互いに挨拶をかわす仲の人もいます。

現在私等は、医療・パトロール班の方針として、傷病者の利益を最優先すること、そして救急医療に関わるすべての方々を人命を最優先に行動する、つまり私等医療・パトロール班の同志であると認識することを掲げていこうと考えています。まだまだすべてに拙い私等ではありますが、そんな私等にでもご協力くださるという型がいらっしたらご連絡ください。宜しく願います。

《越年期の救急対応記録》

- | | | |
|--------------------------------------|--------------------------------------|--|
| ① 42歳男性 胸部痛、発作
29日21:30 添乗○ 入院 | ④ 41歳女性 発熱、動悸、嘔吐
2日13:20 添乗○ 処置のみ | ⑦ 62歳男性 腹痛
5日 2:00 添乗×
処置のみ |
| ② 61歳男性 左額部外傷、咳
30日21:20 添乗○ 入院 | ⑤ 56歳男性 胃痛
4日午後 添乗○ ドヤ緊急保護 | ⑧ 66歳男性 風邪、高熱
6日 2:00 添乗○
処置のみ→さくら寮へ |
| ③ 51歳男性 腹痛、飲み過ぎ
31日11:30 添乗× 処置のみ | ⑥ 53歳男性 足の腫れ
4日午後 添乗○ ドヤ緊急保護 | |

昨年春から新宿ダンボール村での月1回の医療相談に関わるようになった。短く狭い関係を自覚した上で、いくつかの断想を書き述べたい。

野宿労働者の医療をめぐる状況

医療相談には毎回30～50人程度が訪れる。症状を中心に生活・仕事上の問題も伺いながら診察し、軽い問題の場合にはその場で市販薬を出したりアドバイスの対応をするが、特に医療・福祉的サポートが必要な場合は、翌日の新宿福祉への行動につなげ、ここから医療や福祉にかかる手続きをとらなければならない。重症緊急的問題には、救急施設と連絡をとり、救急車での受診につなげる。

医療相談での印象を挙げると、まず、予想以上に病気が多様で、深刻な例が多い。風邪や頭痛、胃痛や腰痛といった一般的な症状の人々に混じって、肺結核や心疾患、肝硬変などの重篤な問題を（重篤化させて）抱えこむ人がせっぱつまって訪れる。結局、医療への近接性の悪さが問題を重症化させてしまっている。

これは、「住所不定」者に対する煩雑な医療福祉システム（更に、この医療システム自体が知られていないことにも問題がある）に基盤があり、その上に、医療福祉現場で過去に不誠実な対応をされた心的外傷が重なり、元来底辺労働者として生きる中で培って来ざるをえなかった、社会システムへの絶望感が増幅されて、形成されているように思える。問題を巧く表現できずに自嘲自罰的に抱えこんでしまう例が多い。（うつ病者やアルコール依存者の背景にこうした自罰厭世的傾向があることが多い。）

栄養不良で全身衰弱、重症肺結核で死亡という、高度医療を誇る飽食日本で驚くべき例もあるのである。最低の生活・医療的支持があれば治るもの

が致死的となってしまう。

高血圧や糖尿病などの成人病や、過去の労災や長い過度の肉体労働による筋骨神経系疾患や、慢性気管支炎、慢性胃炎、皮膚病など、慢性で長期のフォローアップが必要な病気も、医療の継続性や支持性が悪く、悪化する人が見られる。

世間の野宿者像の問題

次に挙げておきたいことは、世間的には野宿者に対しては「仕事もせず、仕事をする意欲もなく、勝手に落ちぶれた人々」というイメージが強いが、こうした「不労者＝浮浪者」的人物像は実際には当てはまらない、ということである。日雇い等の肉体労働をしているが、仕事自体が少なく不安定なため収入が乏しく、ドヤ（簡易宿泊所）にも入れない、という例が多い。慢性の過労や病気で体調を崩し、また加齢もあり一層に仕事が見つからなくなり、失業（アブレ）と病気・失調との悪循環に陥って「浮浪者的」生活の深みにはまりこみ、そうこうするうちに病気が重症化して空しく死にまで至ってしまう、というのがここでの典型と思われる。

我々が安定した勤務生活（実は危うい安定に過ぎないのかもしれない）に視野狭窄的に強迫的に没入することで見失いがちな、現代日本の経済＝雇用構造の問題がここに集中的に表現されている、ということをおぼえてはならない。危うい安定感や豊かさを保障したいがために、病み老いた「先輩」方に対する抑圧的排除（や否認）の思想や行動に駆られてはならない。高度成長期以降の日本社会を、その根底で支え続けてくれた人々が、ひとより数層倍早く老い病んでしまった時、もう、少しは楽を見てもいいではないか。皆いつか職を失い、老い病んでいく存在であることを忘れてはならない。

「出会いの場」としての可能性

ところで残念ながら、新宿での医療関係者の評判はあまりよくないことを申しておきたい。勿論すべてではないが、露骨に差別的に扱われて通常の診察の場にすら立てなかつたり、漸く診療の場面に至っても、詐称や疾病利得と疑われて「軽症化」されたり、入院しても病院の管理の論理に抵触する出来事があると、その理由を考慮に入れてもらえぬまま組織防衛的に排除されてしまったり、という事例に事欠かない。全般的に、彼らの生活状況に関する誤解や無関心が悲劇を生んでいるようである、と自らの後悔と反省と自戒もこめて述べておく。実は診療の場は、野宿労働者と、「昼も夜もなく働き、過労死寸前の超多忙、自然に外界の情報から疎く視界も閉ざされてしまう」医療労働者との出会いの場、即ち、現代日本社会の労働構造の問題を、後退鈍慢化した形で担うことになってしまった者と、先鋭化した形で担う者との貴重な出会いの場なのだが。（実は誰にとっても同じ構図が成り立つのだろうが。）医療労働者には、「浮浪者」の枠組みで患者を縛り上げる前に、彼らの話をよく聴いてほしい。（私自身、先日、新宿路上での凄まじい寒さを経験し、ダンボールハウスで冬を凌ぐ彼らの不安を改めて認識した。）また新宿の野宿者ならびに支援者には、医療労働者の抱える問題も思いやって頂いた上で我々を教え諭して頂きたい。

医療相談の場も、診療の場も、今後医療の価値観と構造が変わっていくための基底としての可能性を秘めている。それは、新宿を取り巻く状況が、将来社会の価値観と構造が変わっていくための基底としての可能性を秘めているのと同じだろう。

より良い関係をめざして

型づけされ管理されて速度競争で走りどび、根を失い疲れ果てながら、うたかたの繁栄に酔う勤労者層と、そこから舞い逃げて仮の奔放さを謳歌しているが、いずれこれに糾合されるだろう若者層と、そして病み老い脱落した人々が隔離収容さ

れる高齢者・病者の層。いずれの層も貫いて、意識化統合を欠いた精神的脆弱性が溢れかえっている。

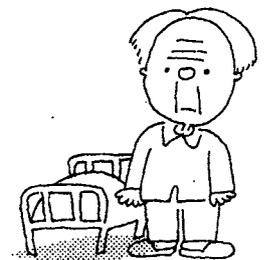
病理に満ちた現代日本社会で、新宿ダンボール村の住民は、一面で社会のルールからつき離されながら、多面で社会の桎梏から外れ、互いの関係を築きながら、したたかに逞しく生き抜いている。この陽性の側面が、人々の心を捉えるのである。

通り過ぎる人々は、或いは興味深く眺め、或いは親しく話しかけ、或いは声をひそめて急ぎ去り、或いは暴力的に挑みかかる。異質性、違和感自体は、相対化や客観的再認識の前提である。しかしこれに共感の配合がある時、よい理解や関係が出来上がるだろう。

すべての人が差別されず、自らの可能性を発展でき、安心して生き、病み、老い、そして死ぬことができる社会に一步でも近づけるように。今後、医療・福祉・行政担当者との良い関係を構築していけることを願っている。

将来的には新宿に、労働・生活・医療ケースワークと住の確保をそなえた、半官半民の非収容的開放的な労働生活センターができることが望ましいと（個人的には）思っている。

最後に、日常的にダンボール村に関わり、周辺まで一人一人をたずねてパトロールし、救急車に添乗し、福祉行動と医療受診に付添い、入院患者を訪問し、退院患者を支持している、新宿連絡会の野宿者や支援者の皆さんにご苦勞様と申し添えたい。医師は診察して紹介状を書くだけで、実際の医療は彼ら自身が行っていることを改めて強調して筆を擱きたい。



「心をひらく輪」 -参加する人みんなが生きる元氣を得られる場に-

池田幸代

私が約三年前、新宿に来はじめたころは、女性の姿はあまり見えなかった。その半年前から山谷のやま食堂で皿洗いをしていたが、その時も、なぜアオカンする女性が見えないのだろうかとずっと疑問に思っていた。「弱い」と見なされる存在だからサポートする体制が整っているからなのか、アオカンではなく、どこか吸収される場があるのか、これは今でも分からない。

私も若い女性だということで、暴言や脅し、セクハラを受けたりしたこともあり、居にくさを感じることがあった。週末に通うだけの私でもこんなに嫌な思いをするのだから、常時いる女性は推して知るべしだと思っていた。

その後、徐々に女性たちと出会え、少しずつ話す中で、彼女たちの多くが男性に押しつぶされてきた・いる関係に直面しているのではないかと思った。結果として、一方は男性に依存し、彼に属してしまい、他方は男性との関係を一切断ち切り、孤立してしまうという両極端な状況になる。その状況すべてを否定することは私には出来ないが、息苦しさを感じていながら、もがきながら生き抜く彼女たちの生命力を活かす方向が他にもあるのではないかと思わざるをえなかった。



昨年五月、私が学生時代から関わっているYMCAのミリアムというグループで北アジア地域の女性たちを招き二週間の「女性のリーダーシップトレーニング」を夏に開くが、その時に新宿に住む女性の話を知りたいという申し出があった。そこで、新宿で暮らすYさんに相談した。彼女が話し手として参加する件を承諾してくれ、のみならず女性たちの置かれている状況について話せる相手になってくれた。

“Women, You are important.”(訳すと、女たち、あなたは大切な人なん

だよ) -歪められた構造を越えて共に気持ちを紡ぎ合うために」をテーマに開かれたこのプログラムで私の女性のセルフヘルプグループを作りたいという思いは一気に膨れ上がった。

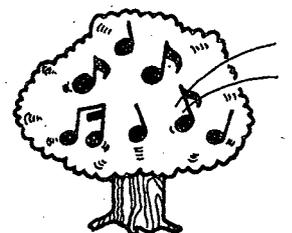


十一月から女性の集まりを始め、名前がなくちゃ始まらないということで、Hさんの提案で「心を開く輪」に決まった。「心をひらくわ!」にもかけている。

今年の越年中には、総勢十八人で初詣にも出かけた。今は一カ月に一回のペースでお茶会を開き年齢も大学生から、六十歳代まで様々で、普段は出会うことの少ない異年齢の新宿に住む・通う女性同士が出会う場にし、お互いに刺激を受けられたらいいなと思っている。

さらに一人では背負いきれないことをお互いが受け止め、お互いの内側にエネルギーを溜め自信を持てるような、生きる元氣を得られるようなつながりを目指したい。そのためには、「個人の経験」を個人的なことに止めず、私達共通の知恵に変えていくことが必要だ。

私がこれまで経験したことのないことが起こり、その度におろおろしたり、たくさんの人に相談しまくったりしている。どんな大変なことも一人で背負わず、みんなで頭突き合わせて考えりゃなんとかなるだろう!女性の皆さん参加してね。



動き始めた歯車

Y. T.

ここ1年あたりで新宿西口に女性が多く見られるようになった。私をふくめ10人ちかくの女性がいる。私は4年前に借金をつくり、2年半ほど前から野宿をしながら仕事がある時は行き、生活をしている。

初めて野宿をした時はやはりこわいと思ったし、とてもさむい日だったのでねる事ができなかった。西口の仲間はどうかだろう。やはりこわいと思っているだろう。パトロールひとつをとっても男性がくるより女性がきた方がいいのではと思う事がある。

11月23日に女性だけのパトロールを初めて新宿でやりました。もちろん失敗です。時間的にもパトロールするコースなども問題がありすぎました。2度目は12月におこないました。そして3度目、正月だったので皆で初もうでにいき、すこしずつですが参加してくれる人もふえ、話もパートナーの酒の話がでたり、本当にすこしずつ歯車がうごきかけています。

まだまだですが、この歯車をとめることなく、新宿で私をはじめ野宿をしている女性たちのために、なにをすべきなのか？を課題に皆と力をあわせていきたいと思います。

越年闘争雑感

渡辺秀明

私の生業は、福祉事務所の生活保護ケースワーカー。学生時代から山谷の越年闘争には少しではあるが関わりをもってきたのだが、生活保護ワーカーとなり、また新宿のセンパイたち達と顔を合わせるようになってから、自分の中の“コウモリ度”、言いかえれば自己分裂度をより強く感じるようになってきた。

杉並区南福祉事務所は、住宅街にあり、野宿労働者の相談件数は新宿区や台東区に比べ圧倒的に少ない。にもかかわらず、いやだからこそ野宿労働者に対する差別的意識は職員のなかに刷りこまれている。相談に来る野宿労働者のことを福祉事務所の中では、“マル都”と呼んでいる。住所が不定であるため、東京都が費用を負担することから来ている言葉である。警察が暴力団のことを“マル暴”と呼んでいるのと同じニュアンスである。「マル都を信用しちゃいけないよ。福祉のいうこと聞かねえんだから。」古株のワーカーは私の耳元でそう囁く。職場でビラを撒いたりして意識的にそうした雰囲気と対峙しているつもりなのだが、知らず知らずのうちにカウンターの外にいる相手の顔を見なくなっている自分に気づき、愕然となる時がある。

新宿や山谷へ足を運び、オッチャンやオバチャンと話をするると実にひとりひとり豊かな表情を持っていることに気づく。そう感じるとなおのこと、現場での、職場での自分の姿がコウモリのように思えてくるのだ。小役人と野宿労働者、さらには住民との関係をいかに変えていけるのだろうか。私はその日がくるまで自分の中のコウモリを抱えていくしかないのだろう。そんなことを思っていた越年闘争であった。

さくら寮とは…

さくら寮とは毎年12月下旬から3月まで開設される「冬期臨時宿泊施設」です。新宿御苑のそばの自転車駐輪場の敷地内にあり、定員は約90人。基本的に生活保護が適用されている人が入る寮なのに、施設自体は「法外（生活保護法外）」だという、いびつな形態になっています。新宿連絡会は越年前に新宿福祉（新宿区生活福祉課）と交渉を持ち、このさくら寮内の処遇等について要求を出しました（要求書を参照）。その結果、ささやかですが、寮開設3年目にして初めて、糖尿病などの病人用にお粥を出すシステムを作らせることに成功しました。

寮自体が法外で、実際に運営しているのが民間の委託業者であるため、入寮者の健康状態など一人一人の細かいケアの体制は整っていません。私たちは新宿福祉に対し、通院が必要な入寮者については病気の状況を寮の側に通達するよう要求し、一部は実現しましたが、民間業者に詳しいプライバシーを教えられない、ということもあり、システムの不備が露呈していました。その分、時には私たちが間に立つ形で、入寮者の健康への留意を寮側にも働きかけています。

定着した寮前での「寄り合い」

さくら寮への面会行動は、普段は毎週金曜日に定例化し、越年期は大晦日と年明けの5日に2回行きました。当初、ハンドマイクで寮の外から呼びかけるという形をとり、寮の職員から苦情が出たため、2回目以降は、寮の職員に「新宿連絡会の面会が来た」という寮内放送を入れさせるという形をとっています。毎回、20～30人の仲間が寮から出てきてくれ、寮の前の芝生にブルーシートを敷いて「寄り合い」をおこなっています。「寄り合い」では寮に入っている仲間の不安や相

談事にこたえる形で、生活保護制度のこと、仕事のこと、健康のことなどについて語り合い、寮の中と、外で野宿している仲間との交流がなされています。また、正月にはダンボール村に何人もの寮の仲間から年賀状が届き、1月2日に西口地下で行われた恒例のもちつき大会にも多くの仲間が駆けつけてくれました。

福祉行動に寮の仲間が合流

1月16日にはもう一つの越冬施設である「なぎさ寮」（大田区にあり、300人規模。こちらは誰もが入れるが基本的に2週間のみ）が開設し、さくら寮からも一部の人がそちらに移りました。さくら寮の中には病院の通院の都合などで移動をを好まない人もいたため、1月5日の「寄り合い」では、この件についてみんなで討議し、翌日の福祉行動で福祉の責任者と話し合いを持つことにし、寮の仲間にも福祉行動への合流を呼びかけました。この結果、翌日の福祉行動には寮からも数人の仲間が参加し、新宿福祉の係長と話し合い、「移動する人の選定基準」について、ある程度、明らかにすることができました。こうしたこともあって、寮の仲間の中には移動を拒否し、ケースワーカーに掛け合ってさくら寮に居つづけることを認めさせた人もいました。

寮の仲間の一部は既に上野の「生活相談一時保護所」や老人ホームなどに移りました。移った先からお便りをくれ、近況を知らせてくれる仲間もいます。さくら寮は3月で閉鎖になりますが、今後とも新宿を離れた仲間とも交流を持続していき、困った時はお互い助け合える「仲間の輪」がより大きく広がっていけるようにしていきたいと思っています。

新宿連絡会 新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付
03(3876)7073 030(818)3450

要求書

新宿駅周辺で野宿生活を余儀なくされている労働者の現状は、本年1月の東京都による強制排除により尚一層過酷さを増してきている。野宿者が自主的に築き上げてきたコミュニティを破壊され、風のあたらぬ、かつ通行人とのトラブルが避けやすい構造であった地下道を追われ、そこに居住していた二百名近い野宿者の多くは、暖を取ることも出来ない風さらしの地下広場に移るなど、より厳しい環境のなか生活せざるを得なくなっている。また青島知事の差別的な扇動に踊らされた心ない通行人からの冷たい視線やイヤガラセを直接受けるなど肩身の狭い思いもせざるを得なくなった。更に京王新線駅地下通路からの追いだしや東京都第3建設事務所による「一斉清掃」に顕著なよう官民一体となった追いだしやイヤガラセに日々さらされるようもなった。

(中略)

越冬期に関する我々の切実な要求をまとめたので、今後の「路上生活者対策」の対応に反映されるよう検討を願いたい。

要求事項

I、

「自立支援センター」計画を一時凍結し、野宿労働者の実態、野宿生活に至る根拠などを当該、支援団体と協力しながら調査し直し、野宿者代表、地域住民などが参加できる市民参加型の協議機関を設け、現行「路上生活者対策」を抜本的に見直すこと。

II、

- 1、野宿労働者問題を人権問題としてとらえ、野宿者への襲撃、虐殺、イヤガラセの実態を調査し、都民、区民に啓発すると同時に、教職員に対する研修活動を行い、教育現場に反映させること。
- 2、野宿者が路上で生活する上で生じる個別具体的な苦情や利害衝突に対しては、強制的な手段を取らず、関係者、関係団体が話し合える機会を設け、話し合いでの解決を率先して行うこと。

- 3、右翼新聞社「全東京新聞社」がよびかける「懇談会」に新宿区としては今後一切参加しないこと。地元商店街や東京都・建設局との協議機関が必要なのであれば、当然そこに当該野宿者団体の代表を参加させるべきであり、中立的な立場の機関を区が率先して設ければ良いだけの話しである。
- 4、10月30日名古屋地方裁判所判決（林訴訟判決）の趣旨を尊重し、法4条の限定的、制限的な解釈をやめ、要保護者への生活保護法の適用を積極的に行うこと。また、その為に東京都・国へ積極的に働きかけること。

Ⅲ、＜96-97 越冬対策施設に対して＞

- 1、「越冬対策施設」は緊急法外施設として活用し、生活保護世帯、とりわけ通院患者の入所を基本的には行わないこと。更生施設の不足などでやむをえず入所させる場合は、更生施設水準のケアが可能であるような部屋配置、職員配置を行うこと。また、病状に即した食事が提供できるよう、施設内に厨房を設置し、調理師、栄養士を配置すること。および管轄福祉、病院、施設管理者との連携をこれまで以上に密にすること。
- 2、「越冬対策施設」内では入所者の自治権を認めること。そのために集会室や施設備品の利用など便宜を図ること。門限など施設入所者にかかわる規則は、施設入所者代表と話し合い民主的に決めること。
- 3、娯楽設備を充実させること。映画会などを最低週に一度は施設内で開催すること。
- 4、無料ロッカーを設置するなど、入所者の私物、貴重品を責任をもって管理出来る体制を作ること。
- 5、「越冬対策施設」内に屋根つきの面会室を設けること。
- 6、協力医療機関との連携を今まで以上に密にし、緊急時の対応を職員に徹底させること。医療回診の仕方も各部屋に医者が訪れるなど入所者全員に配慮したやり方に改めること。
- 7、「越冬対策施設」内に都民が利用できる行政サービス（例えば面接時の往復の交通費貸し付けサービスや、日雇雇用保険の取り方、都内の職安や福祉事務所の場所など）情報が一覧できる印刷物などを張り出すこと。

Ⅳ、＜96-97 新宿区の越冬対策として＞

- 1、「越冬対策」として早急にカンパンの支給を再開すること。
- 2、年末・年始対策として9日分の食料（カップ麺、カンパン、防災用のカンズメなど）を希望者に提供すること。
- 3、「越冬対策」としてフロ券、下着、古着の支給を行うこと。
- 4、シラミ駆除薬、ネズミ駆除薬、消毒液、ゴミ袋を衛生的な観点から当事者団体に支給すること。
- 5、医療対策として越冬期、とりわけ年末・年始に緊急用ベッドを複数確保し、急病者がすみやかに入院、緊急治療が出来るよう救急隊、医療機関との事前の連携を密にすること。

- Ⅴ、上記要求事項に対しては、新宿区内および関係各局と協議検討した上で96年12月6日まで文書ないしは口頭で回答を行うこと。

以上。

1・6 福祉行動

福祉行動は越年闘争の締めくくりとして、役所初めの1月6日に行われました。今回は役所の閉鎖期間が9日間と長かったことも反映して、前日の医療相談相談者を中心に過去最多の39人が参加しました。

いつものように朝8時半に西口地下インフォメーションセンター前に集まり、歩行が困難な仲間は車イスに乗ってもらって元気な仲間が押していく、という形で東口の新宿区役所2階、生活福祉課（福祉事務所）にみんなで行き、申請した結果、ほぼ全員が医療を受けるなど希望に沿った対応を受けることができましたが、病院を自己退院したこと、現在、仕事があることなどを理由に診療を認められなかった人も3人いました。また39人中、6人が入院、7人が寮やドヤなどからの通院という形になりましたが、多くの仲間が野宿しながらの通院を強いられる形になるなど、改めて生活保護の運用の問題点も浮き彫りになりました。

以下は個人別の結果報告です。

▽前日の医療相談相談者および越年中の医療テント宿泊者（33人）

・45歳男性	胃痛	都立病院入院（福祉から救急車で）
・55歳男性	狭心症の疑い、両足むくみ	N病院入院（福祉から救急車で）
・66歳男性	高齢、高血圧、鼻血	N病院入院
・40歳男性	肺結核	K病院入院
・64歳男性	肺結核	K病院入院
・54歳男性	アルコール依存症	I病院入院
・69歳男性	高齢、舌の障害	さくら寮
・66歳男性	高齢、かぜ	都立病院通院、さくら寮
・56歳男性	胃痛、1/4 ドヤ緊急保護	さくら寮
・53歳男性	右足腫れ 1/4ドヤ緊急保護	引き続きドヤ宿泊
・59歳男性	胃痛	S病院、ドヤ宿泊
・63歳男性	白内障	N病院、ドヤ宿泊
・42歳男性	結膜炎、右尿管結石の疑い	S病院、新光館宿泊
・48歳男性	鼻炎、高血圧	S診療所、翌日大病院へ
・60歳男性	肝機能障害、心臓	K診療所
・47歳男性	全身かゆみ	S病院、9日に皮膚科へ
・58歳男性	坐骨神経痛	H外科、10日に再来
・60歳男性	めまい	S病院
・57歳男性	足のケガ、かぜ、腎臓	S病院
・42歳男性	腰痛	国立Kセンター
・47歳男性	精神的につらい	翌日、都立病院へ
・42歳女性	高血圧	翌日、S病院へ
・48歳男性	手足のしびれ	翌日、病院→施設へ

- ・ 37歳男性 高血圧 翌日、C病院へ
- ・ 45歳男性 甲状腺、肝臓 翌日、大病院へ
- ・ 57歳男性 左半身不全マヒ 翌日、大病院へ
- ・ 57歳男性 1/4 自己退院、腰痛 診療不可
- ・ 53歳男性 視力低下 住民票のあるK福祉へ
- ・ 56歳男性 歯が折れた（痛みなし） 診療不可
- ・ 64歳男性 給料を取りにいく 交通費支給
- ・ 45歳男性 腰の腫瘍（明日、仕事に行く） 診療不可
- ・ 61歳男性 求人活動したい 電話かけをする
- ・ 25歳男性 やけど、アルコール依存症 S病院

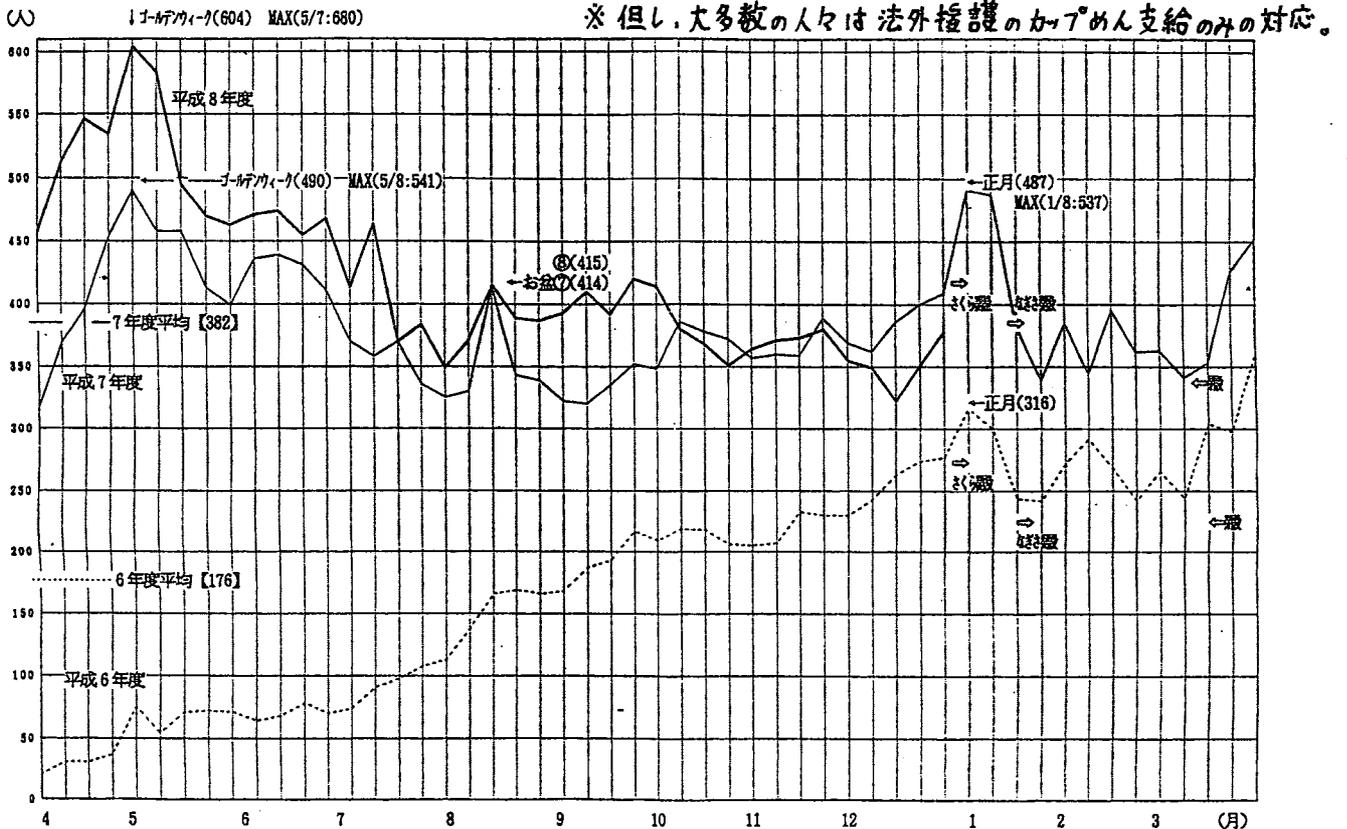
▽当日初めて出会った人（6人）

- ・ 57歳男性 眼、十二指腸潰瘍 翌日、国立Kセンターへ
- ・ 65歳男性 高血圧 翌日、S病院へ
- ・ 35歳男性 仕事に行く 交通費支給
- ・ Aさん 頭のケガ C病院
- ・ Kさん 頭のケガ 都立病院
- ・ Tさん アルコール依存症 外国人登録のあるA福祉に行けと言われる

<新宿福祉資料>

住所不定者等来所相談者数・週別（一日平均）

平成8年12月27日現在



や3回新宿越冬闘争突入!

12月12日~14日の三建一奇清掃、を返す闘争の冬
 追い出し負け、新しい仲間をつくる風結を。明日は三建夜生
 をやらせ。

新宿越冬闘争第1派
 集中行動スケジュール
 12月2日(月)

福祉行動 朝8時半
 西口地下インフォメ前集合

三建との交渉 昼12時
 西口地下インフォメ前集合

カンパ活動 夕4時
 西口地下インフォメ前集合
 12月3日(火)

朝情宣 朝8時
 西口地下インフォメ前集合

カンパ活動 昼1時
 西口地下インフォメ前集合
 12月4日(水)

裁判傍聴 朝11時
 西口地下インフォメ前集合

三建清掃告知監視行動
 昼12時 西口地下インフォメ前集合

寄り合い 夕7時 インフォメ前
 新宿パトロール 夜9時出発
 12月5日(木)

カンパ活動 夕4時
 西口地下インフォメ前集合
 12月6日(金)

住民監査請求行動
 朝8時半 インフォメ前集合

新宿福祉第2回交渉
 朝10時半 インフォメ前集合

高田馬場パトロール
 夕6時 インフォメ前集合
 12月7日(土)

カンパ活動 昼1時
 西口地下インフォメ前集合
 12月8日(日)

炊き出し準備行動
 朝11時半 インフォメ前集合

学習会 昼1時 インフォメ前集合

炊き出し、医療相談
 パトロール
 夕7時からインフォメ前で

仲間たち!
 本日、第3回新宿越冬闘争突入にあたり、
 残念な報告から始めなければならぬ。昨日
 30日早朝、安田生命前で50台の仲間が亡くな
 っている所を発見された。最近流れて来た仲
 間のようだが、酔って寝ているところ明け方
 の寒さで熱を奪われそのまま冷たくなってし
 まったらしい……。無念追悼。
 インフォメ周辺では11月14日に発見された
 仲間とあわせ、この冬2人目の犠牲者だ。28
 日には交番近くの仲間も救急車で運ばれたが
 亡くなってしまったという話もあり、西口
 地下だけで3人ももの尊い命が奪われたこと
 なる。

この3人の仲間の死は今年の冬の厳しさを
 確実に物語っているだろう。長期にわたり強
 いられている野宿生活、強制排除や追い出し
 によって寝場所すら奪われている現実、福祉
 対応の立ち遅れなど、俺たちを取り巻く環境
 は、俺たちが強いられられたコミュニティを作り
 ながらも、それでも年々悪化している事は確
 かだ。その現実に苛立ち、仲間は酒に走る。
 そして命を縮め、内部矛盾も拡大する。俺た
 ちが言い続けて来た団結も、現状はミミツチ
 イ団結しか作り得ていない。仲間たちは生活
 防衛に必死となり、ゆとりすらなくなってい
 る。
 3人の路上での死を考えると「一人の野垂
 れ死にも許すな」という、俺らが毎年言い続
 けてきた越冬闘争スローガンの虚しさを率直
 に感じざるを得ない。一人どころか俺らは毎
 年、何人も路上に横たわった死体と向き合
 わざるを得ない。いくら「立派」なことを言
 ったとしても、今の俺たちの現状からは、そ
 れは単なる「いい事言い」に過ぎず、混沌と
 した現実の外でスピーカーがガナっている事
 と似ている。
 「もうこれ以上死者を出したくない」とい

新宿連絡会

新宿野宿労働者の
 生活・就労保障を求める
 連絡会議 96年12月1日
 第11期 NO9

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け☎03(3876)7073

うのが俺らの今の率直な気持ちだ。そして、それ以上の事は今年の冬は言うまい。俺らが「立派」なことを言うたびに根底からその言葉が崩れ去る俺たちの現実に対して、俺たちはそれに向き合うことしか出来ない。

散々な今年の冬の入り口に際して、死者に花をたむけることしかできない弱い俺たちの主体を問い直そう。そして、仲間全員が生き抜くための方策をもっと真剣に考えよう。たかえばどうにかなるなんて、学生運動じゃあるまいし、もはや俺たちにはそんな崇高な理想や幻想など持ち得ない。俺たちのたたかいは今日一日を生き抜くための格闘だ。明日の朝の保障など誰一人として持ってやいない。そしてだからこそ、この厳しい冬の中、今日一日を生き延びていくための方策を皆んなで考え、実践しよう。それが俺たちの越冬闘争である。

強制排除と自立支援センター

今年の1月24日、東京都は4号街路に住む

仲間たちを新宿から叩き出すために「動く歩道」建設を名目とした強制排除の暴挙を強行した。過ぎ去った事を今更という仲間もいるかと思うが、この強制排除という対策は東京都が取り得る唯一の「路上生活者対策」であるという事を、是非肝に命じてもらいたい。

口先のうまさでは東京都は天下一品だ。「人道上に配慮して」「自立を支援したい」と思います」などなど、強制排除の前も後も奴等は同じ言葉を繰り返している。裁判の法廷の中でも奴等は1・24は強制排除ではなかったとまで嘘を言い繕っている。曰く、「芝浦寮をつくって人道上に配慮した」からだと言う訳だ。

昔からアメとムチという言葉がある。旨い話しには裏があるという事だ。道理が通らない事には旨い話して世論をごまかし、ムチで打たれている人々の事は日の目にあたらないよう隠し通す。

俺たちは野宿生活を一日でも早く脱したい

と願っている。だからプレハブだろうが何だろうが屋根のついていない部屋があればそこに泊まりたいと思うのは不思議な事ではない。そこで人の弱みにつけこんで奴等は芝浦寮のようなものを作る。しかしこれには裏があり、見返りは4号街路を閉鎖し野宿者を新宿から追い出すことだ。芝浦寮にした所、一生面倒を見てくれる訳ではなく、再び野宿に戻った仲間は結局帰る場所すら奪われている。

これが奴等のカラクリだ。

東京都が言っている「路上生活者対策」という旨い話しは結局のところ俺らをいかに追いつめるかという点に集約されていく。

だから、強制排除はこれからもいくらかも続いて行く。今あるダンポール村も例外ではない。条件を整えば1・24のような事は奴等はいくらでも続けて行く。

そして、その条件が「自立支援センター」という訳だ。この「自立支援センター」というのは、50人を一か月だけに屋根つき部屋にいれるかわりに、残りの仲間を寒空のもとに

放り出して行くというものである。仲間に

「良いホームレス」と「悪いホームレス」という烙印をつけ、入所しない、あるいは一カ月に仕事につけない「悪いホームレス」は徹底して強制排除を繰り返すという代物である。

この「自立支援センター」を近々暫定実施しようとする動きもある。という事は近々強制排除が再び行われても不思議ではないという事だ。3建は「一斉清掃」と称したイヤガラセを2か月に一度定期的に行おうとしている。都や商店街のガードマンもでかい顔を始めている。そんなのも強制排除の前触だろう。

こんな情勢の中、強いられたダンボールハウス、強いられたダンボール村であっても、「追い出しなんかには負けない」と仲間が生き抜くための最低限の場所を確保する事が重要な課題となってくる。明日を生き抜くためにも寒さを凌げる場所がなければどうしようもない。安心して寝る場所すら奪われたら、それこそ俺たちの生き抜く環境は今以

上に厳しいものになってしまふ。

94年の2・17から96年の1・24、そしてそれ以降、野宿場所をめぐる基本的な攻防は何も変わってはいない。「追い出しに反対する」という俺たちの運動の基本を守り続け、都の新たな強制排除に抗していける仲間の広範なつながりを今越冬で作っていければと考えている。

12月12日から14日までの「一斉清掃」を西口地下の仲間の力で迎え撃ち、一個のダンボールハウスも減らさない取り組み、追い出しの口実を作らせない仲間の取り組みを強化して行こう！

仲間の命を仲間自身の手で守り抜く越冬を！

冬を乗り越えて行くために必要なことは仲間のつながりだと俺たちは思っている。いくら支援の人が大勢きたところで、その力には限りがある。支援とか福祉に全部おまかせするような他力本願ではイケナイという事だ。物事はいつもそうだが、個人で出来る事と

仲間の力を合わせていかなければ出来ない事と二通りある。仲間がいるからと言って甘えてはいけない。個人出来る事はそれぞれの力を出して行ない、個人で出来ない事は皆の力を出し合ってなんとかする。炊き出しだって、パトロールだって、福祉行動だって個人の力だけではなかなかうまくはいかない。皆んなの全体の利益にかかわることは、仲間の力を出し合った方がいい。誰が偉いとか誰が仕切っているとかじゃなく、仲間が平等に知恵と力を出し合えばうまく行く筈だ。

仲間のつながりというのは、一部の仲間ではなく仲間全体の利益のために仲間がつながって行くということだ。

仲間の命を守るといっても、自分の命は自分で守るといことが基本となる。その上で金がなければ飯も食えないし、毛布も薬も買えない。知り合いがいなければ寝場所も確保できない。そんな仲間にはどこに行けば炊き出しがあり、毛布ももらえ、病院に行けるかという情報がまず必要だ。そしてそういう

仲間を支えあつて行く関係が必要だ。個人の力で自分の命を守るといふのは限界がある。病気の事の相談相手すらいなければ不安になるだけだ。そんな限界を俺らは仲間のつながりの力で克服して行きたい。

何年新宿にいても、今日始めて新宿に来た仲間も同じ野宿の仲間であることには変わりはない。知らない事は教えてあげる。そして新たな仲間のつながりを広げて行く。こんなゆとりのある関係がなければ仲間の命を全体の力で守っていくことなどとうてい出来ないだろう。

もちろんそのために、この冬医療相談を増やしたり、パトロールや福祉行動を強化したりと、そういう取り組みは今まで以上にやっていきたい。さくら寮は12月19日開設される。病気の仲間や高齢の仲間が福祉を通して生き抜いていける条件をさくら寮も利用しながら俺たちは作っていききたいと思つている。また、寮への面会や福祉への要求行動など改善にむけた取り組みもやっていきたい。

しかし、一方でこれは十分な取り組みではない。仲間の命を守る基本的な取り組みは仲間の日常的な事業にしていかなければならないのだ。

もうこれ以上死者を出さないためにも、仲間の広いつながりを、正確な情報ネットワークをこの冬作りだして行こう！

俺らの団結を広げて行く越冬闘争を！

野宿地をめぐる攻防と冬將軍の中で命を防護していく取り組みを基礎にしながら、俺たちは12月期の越冬前段闘争、年末年始の越冬闘争、1月から3月までの越冬後段闘争まで4ヵ月間にわたる越冬闘争に突入する。俺たちはこの中で、山谷の越冬闘争、渋谷の取り組みなどと連携しながら都内各地で俺たちと同じく野宿しながら冬を越そうとしている仲間とのつながりをもっと大きく作り出したいと思つている。そのためにもまず新宿駅西口地下だけの小さな集まりではなく、地上の仲間、戸山公園や馬場の仲間とも大きくつなが

りあい、新宿区内の野宿の仲間、日雇の仲間の大きな団結をつくり出していきたい。

ホームレスと呼ばれている「ダメな人間」でも仲間のつながりを通してやり直すことが出来るし、人間として自衛を持って生き抜くことが出来るということ、そして野宿だからといって決して絶望することはないんだという事を俺たちは新宿西口のたたかいの中で作ってきた。この新宿のたたかいの地平を是非多くの仲間と共有しよう。西口地下という殻に閉じこもっていたら、俺たちは封じ込められ都に好きなようにされるか、内部矛盾が激化して自壊するだけだ。区内、都内の同じ境遇の仲間をどんどん増やして行こう。いろんな場所で仲間は必死に生き抜くために頑張っている。そんな仲間と出会い、協力しあい、むすびついていける、そんな関係を西口地下を攻撃拠点にしながら今越冬闘争の中で作りだして行こう。

仲間たち！この冬一致団結しよう！

(96年12月1日新宿連絡会・事務局)

96 ~ 97 新宿越年斗争 本日突入!

仲心の命を仲心自身
の力で守り抜く
仲心の結集を!

96-97新宿越年闘争が今日から開始される。仕事もとぎれ、役所もしまる年末年始の9日間、俺たちは仲間の方だけを頼りに、仲間の命を守り抜く越年の取り組みを全力で行なっていく。

本96年は1・24強制排除で幕が明けた。東京都はがむしゃらになつて俺たち野宿の仲間を新宿から追い出そうとしてきた。しかし、俺たちは4号街路の仲間を先頭に、都職員、ガードマン、機動隊、総勢千人をむこうにまわしバリケードを築き、座り込みで徹底的に抵抗しぬいた。12名の逮捕、3名の起訴という大弾圧をくらったが、このたたかいの息吹で俺たちはインフォメ前に新たなダンボール村を作り、東京都による追い出し攻撃を打ち破り今も新宿西口に生活の拠点を築きあげている。

俺たち野宿の仲間はこれまでは、役人やオマワリの言うがままに追い立てられ続けてき

新宿越年闘争2日目

・12月29日(日)

炊き出し行動

AM11:30 本部より出発

会場準備作業

PM5:30よりインフォメ前

馬場パトロール

PM6:00 本部より出発

炊き出し

PM7:00 配食インフォメ前

越冬音楽祭

PM7:00から9:00まで

新宿パトロール

PM9:00 本部より出発

就寝体制(集中アオカン)

PM10:00 本部前翌朝 6:00まで

新宿深夜パトロール

深夜1:00本部より出発

た。そして、多くの仲間が路上で殺されてきた。しかし、今度ばかりは違っていた。仲間が団結して立ち上がれば、例え排除されてもそれでもなお俺たちは生き抜いていける事が出来る。このことを新宿の一年間は証明した。

本、越年闘争はこの地平の上にある。既にこの冬5名の仲間が亡くなるなど非常に厳しい年ではあるが、仲間が一つにまとまっていけばさえすれば、生きる希望は必ずたぐりよせる事は出来る。俺たちは信じている。

今日から連日、炊き出し、パトロールを行ない仲間のつながりを俺たちはもつともつと広く、深いものにして行きたい。是非、多くの仲間が越年の取り組みに参加してほしい。仲間が出来ることは何でもやるう！これが俺たちの越年闘争だ。俺たちは決して一人ポツチではない。仲間を大事にしよう！仲間と共に生き抜いて行こう！仲間の生き生きとした息吹で本96年をしめくくり、共に新たな年を！

新宿連絡会

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求め

連絡会議 96年12月28日 第11期 NO17

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付 ☎03(3876)7073

本部・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンボール村030(818)3450

ミレバ
ギンネ

去年の日目 昨夜、ガードマンと新宿署を引つれ俺らに威嚇。
 文があるから 書き足して...!

東京都の越年斗争つづくと許す

さんなヒマがある
 なら年末年始
 の対策でもしろ

新宿越年闘争3日目
 ・12月30日(月)

- 炊き出し行動
- AM11:30 本部より出発
 - 会場準備作業
 - PM5:30よりインフォメ前
 - 炊き出し
 - PM7:00配食インフォメ前
 - 医療講習会
 - PM7:30からインフォメ前 9:00まで
 - 池袋パトロール
 - PM8:00 本部より出発
 - 新宿パトロール
 - PM9:00 本部より出発
 - 就寝体制集中アオカン
 - PM10時インフォメ前翌6時まで
 - 新宿深夜パトロール
 - 深夜1:00本部より出発

仲間たち！
 昨日28日、山谷、新宿の2拠点の陣地が構築され、東西での96-97越年闘争がついに開始された。

山谷では、昨年の正田建設争議、動く歩道決戦から逃亡し、争議団から抜け出した分裂グループの敵対・妨害策動をはねのけ、山谷-新宿の60名の仲間は昨日2時、山谷センター前に突入。センター前を越年拠点として陣取った。新宿の炊き出しも山谷の仲間と協力しながらセンター前の共同作業で作られる。センター前は山谷と新宿をつらぬく大きな拠点だ。

新宿では、センター前で炊いた飯を運びこみ、夕方6時半、インフォメ前広場で越年闘争突入宣言集会を勝ち取る。東京都建設局、第3建設事務所、ガードマン、新宿署の越年闘争の破壊をもくろむ重弾圧体制の中、4号街路入り口に本部を設営し抜き、インフォメ

前、本部を拠点に渋谷パトロール、新宿パトロールに早速くり出した。仲間たち！96-97越年闘争の拠点が仲間の力で強固に打ち立てられた！俺たちはこの2拠点を軸に1月6日朝まで集中した越年の取り組みを仲間の密集した力でやり抜く！年末・年始のたたかいは、俺たち野宿の仲間にとって引くに引けないたたかいだ。仕事もとぎれ、役所も休みのこの間、仲間の命を守り抜くことが出来るのは仲間の力以外にない。俺たちが培ってきた団結が最も問われる時期でもある。例えば仕事にいらしても野宿をせざるを得ない日雇・下層の仲間の現実の中から、俺たちは野宿を余儀なくされた仲間が一つに大きくまとまって行くことを強く訴える。どんな仲間でも立場は同じだ。仲間をかばい、たすけあい、厳しいながらも生き生きと生き抜いて行こう！俺たちは俺たちの未来と希望を俺たち自身の手でつかんで行く！

新宿連絡会

新宿野宿労働者の
生活・就労保障を求める
連絡会議

96年12月29日 第11期 NO18

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け ☎03(3876)7073

本部・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンポール村030(818)3450

越年突入!

都の妨害はねのけ
本部を4号街路入口
に誘導して

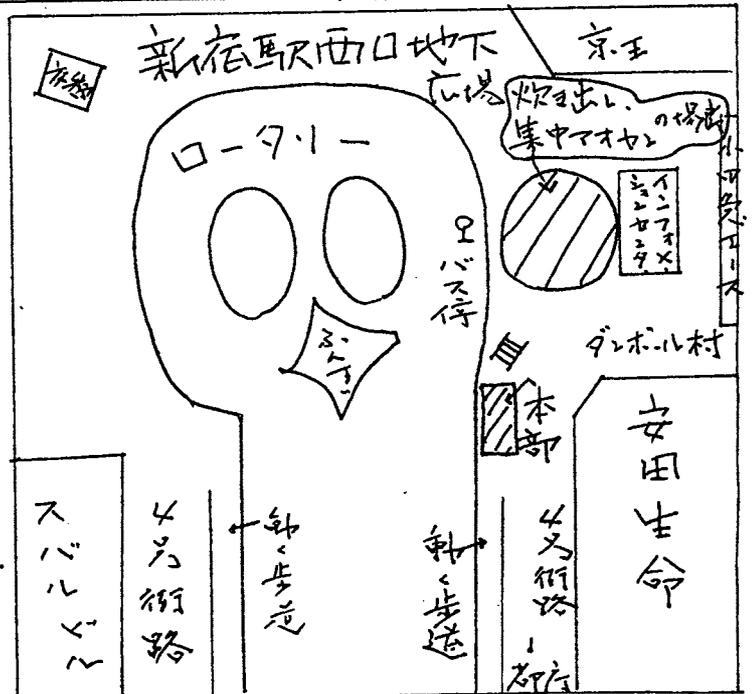
昨夜は東京都建設局と三連の山口などの役人連中が1・24の強制排除に手を染めた警備会社(株)セノンのガードマンを引き連れ、夜の夜中に4号街路入り口にピケをはって俺たちの越年闘争を妨害、破壊しようとして企ててきた。奴等は機動隊まで呼びよせ、俺たちに圧力をかけ、3連山口は「お前らの強制排除などいつでもやってやる」と暴言を吐いた。機動隊に言われて、ためえらで作った禁止区域のカラコーンの位置まで勝手に変えようとした奴等のブザマな姿は、まさに権力を笠に着た役人様だ。東京都の役人はガードマンや機動隊がいなければ口もきかない癖に、権力の前に来ると突然強気になり、本音をもたず。東京都は年末・年始に何の対策もしないで俺たちを路上にほったらかしにしたままだ。その責任すら感じず、俺たちの最低限命を守るうという越年の取り組みにすら奴等は妨害を

しかけて来た。こんな事を俺たちは断じて許すわけにはいかない。俺たちは仲間の怒りの声を徹底的に叩き付け、役人どもを追い返し本部を4号街路入り口の禁止区域に設置しぬいた。そもそもここはカラコーンを置いて通行止めにしていた場所だ。それを通行の妨害などと何癖をつけるのがおかしな話だ。そんなに俺たちが邪魔なら突起物でも作ってみろ!

この混乱のおかげで昨日は寝床がない仲間への集中アオカン体制が十分に取れなかった。ガードマンに監視されていては怖くておちおち眠ることなど出来やしない。そこで今日からはインフォメ前の広場で集中アオカンの体制を作りたいたいと思っている。ちょっと寒い場所だが色々工夫をしながら寝床を確保していきたい。寝床がない仲間は夜9時すぎにインフォメ前広場に集まって下さい。よろしくお願ひします。

東京都の越年闘争つぶしを仲間の力で跳ね返そう! 1・24のオトシマエを俺たちは必ず取ってやる!

1/28
新宿パトロール 450名の仲間とぞあう。
深夜の銀座パトロールの仲間を助けて
まじりぞく。
渋谷パトロール
取組 59名とぞあう。
パトロール 78名
渋谷の仲間を助けて、まじりぞく。



新年闘争4日目

これが仲間の団結だ!

おとし来やねん96年!

終りだ。

新宿越年闘争4日目、あと数時間で今年も

仲間の力で
俺らの命を
守り抜こう

96年は俺たちに取って受難の年であった。

青島のタコが13億円もの税金を使って俺たちを4号街路から追い出したのが1月24日。それを前後して新宿は戒厳体制。今年には計12名の仲間が不当に逮捕され、3名が起訴まで

された。東京都にならって京王電鉄でも仲間の追い出しが突如おこなわれ、営団地下鉄でも執拗な追い出しがなされた。ガキも東京都をならって俺たちを襲撃、中央公園や代々木公園、赤羽の公園などで仲間がいわれもない

暴力の的になり2人の仲間が殺された。悪質なボランテアによって運動も混乱をきたした。また、分裂グループが山谷と新宿の分断

を煽り続けた。多くのかけがいのない仲間も路上で死んだ。がんばり屋のサワちゃんや飲

んべいおやじの斉藤健一も……
苦しかった、辛かった、悲しかった。

新宿越年闘争5日目

1月1日(水)

炊き出し行動

AM11:30 本部より出発

会場準備作業

PM5:30よりインフォメ前

馬場パトロール

PM6:00 本部より出発

炊き出し

PM7:00配食インフォメ前

新春映画・男はつらいよ

PM7:00過ぎインフォメ前

新宿パトロール

PM9:00 本部より出発

就寝体制集中アオカン

PM10時インフォメ前翌6時まで

新宿深夜パトロール

深夜1:00本部より出発

でも、みんな頑張った。本当によく頑張った。今日、こうして皆さんと共にインフォメ

前で年を越せることが、仲間のこの一年をなによりもよく物語っている。どんな苦しい時でも仲間を信じて、共に生きて行くこと。俺たちの団結はそうした団結として立派に成長している。

青島さん、受難の年をどうもありがとう。

おかげさまで、俺たちは4号街路を奪われても、こうして遅く生き抜いています! あんたがホームレスは怠け者だといくら煽ろうとも、あんたが再び強制排除をしようとも、俺たちは俺たちの流儀でたたかい、生き抜いてみせます。おかげさまで俺たちは強くなりました。おかげさまで俺たちはしぶとくなりました。あんにに殺された仲間の分まで俺たちは生き抜いてみせます。とくとご拝見を!

青島のクンタレ!さらば96年!

新宿連絡会

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求め

連絡会議 96年12月31日 第11期 NO20

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け ☎03(3876)7073
本部・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンボール村030(818)3450



あけましておめでとう

1997年元旦

新年おめでとう！

仲間とともに、そして越年闘争の息吹の中で再び新しい年を迎えられる事をうれしく思います。今年こそ俺たちとって本当に希望に満ちた素晴らしい年にしていきましょう。

新宿連絡会は仲間と共に仲間全体の利益を守るため今年も粉砕粉砕で頑張っていきたいと思います。

まだまだ立派な事が言える団体ではありませんが、仲間の叱咤激励を受けながら泥まみれになりながらも前進していくつもりです。

是非今年もよろしくお願い致します。

俺たちの越年闘争も今日で丁度折り返し地点です。東京都による越年闘争妨害で最初はどうなるかと思っただけの越年ですが、日を追うごとに仲間の団結力が強まり、新しい仲間も含めた密集した力で、24時間の本部体制を守り、山谷への炊き出し行動も毎回20名近い仲間が参加し、夜のパトロールや医療対応もみんなが本心に協力しあって頑張り通せる

明日の炊き出しの昼の1時配食です。

夜のラマ。炊き出しは6:00に東京へ

餅つき大会

新宿越年闘争6日目

1月2日(木)

- 炊き出し行動 AM7:00本部より出発
- 会場準備作業 AM12:30よりインフォメ前
- 炊き出し PM1:00 配食インフォメ前
- 餅つき大会他 PM2:00からインフォメ前
- 新宿パトロール PM9:00 本部より出発
- 就寝体制集中アオカン PM10時インフォメ前翌6時まで
- 新宿深夜パトロール 深夜1:00本部より出発 (広域パトはお休みです)

ようになりました。仲間の助け合い、協力があつての新宿です。困った時はお互いさま。一人で出来ない事も、仲間が大勢集まればいかなる事が出来ます。俺たちには金も家も無いが、暖かくってでつかい仲間の団結がある！今年もまたなんだかんだと東京都は追い出しを強めてくるでしょう。でも、この仲間の団結がありさえすれば百人力です。今年も一人ではなく、みんなと一緒にたたかて青島のタコにもう一泡ふかしてやるうじゃありませんか！酔っ払って仲間と喧嘩するくらいなら東京都と喧嘩した方がよっぽどやりがいがあるゾ！

明日は昼(1時)の炊き出しの後、2時から新年の餅つき大会があります。芸達者な仲間も集まります。是非楽しみにして下さい。

新たな決意を固めながら越年闘争後半を仲間の力で乗り切りましょう！

新宿連絡会

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議

97年1月1日 第11期 NO21

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館 気付け ☎03(3876)7073

本部・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンボール村 ☎030(818)3450

俺たち夫人含む！仲間たち！

自信をもって生き抜いていこう

やいばでうらむとび

仲間の命を仲間自身の力で守りぬく新宿越年闘争は西口地下を拠点に展開されている。俺たち社会の底辺で働き続けてきた仲間にとって唯一頼りに出来るのは仲間自身の力だ。例え行政がまともな対策をしなくても、俺たちは俺たち自身の力で俺たちの命と暮らしを守りぬくことが出来る。一人で出来ないことも仲間の力と知恵を集めれば何とでもなるものだ。決して諦めてはいけない。

俺たち新宿連絡会はこの3年近い間、仲間の横のつながりを！と仲間呼びかけて来た。仲間が出来ることが何でもやって行こう！と仲間呼びかけて来た。それまで俺たちは行政や警察の追い出しや撤去によって好きなようにされ、多くの仲間が寒空の中で殺されてきたが、仲間が横につながることにによって、仲間が立ち上がることによって、仲間の命と暮らしを守る手段をようやく知った。ヤケをおこして自堕落な生活をするのではなく、ど

んなに苦しくても、どんなに貧しくとも人間としての尊厳をもち、仲間を信じて共に生き抜いていこうと、常に前向きな姿勢で歩んできた。

この新宿闘争3年の地平の上に今の俺たちの存在がある。この越年闘争、そして首都のど真ん中のダンポール村は俺たちのたたかいの証しでもある。どうすれば俺たち「弱者」が生き抜いていけるのか？それを俺たちは今、実際にたたかい抜いているんだ。

仲間たち！この俺たちが培っている団結に確信をもとう。誰しもが一人じゃ何にも出来ない。そして自分を責めたとしても何も解決はしない。野宿になるのは何も個人の責任ばかりじゃない。住宅政策の不備や、福祉の切り捨て、底辺下層の労働者の権利が保障されてない問題など社会全体の構造的な問題なんだ。胸を張って生き抜いて行こう！「ホームレス」で何が悪い！

- 新宿越年闘争7日目
- あけ 1月3日(金)の
スレイジュール
炊き出し行動
AM11:30 本部より出発
会場準備作業
PM 5:30 よりインフォメ前
 - 高田馬場他パトロール
PM6:00本部より出発
炊き出し PM7:00
配食インフォメ前
 - ビデオ上映会
配食後9:00頃まで
 - 新宿パトロール
PM9:00本部より出発
就寝体制集中アオカン
PM10時インフォメ前翌6時まで
 - 新宿深夜パトロール
深夜1:00本部より出発

- 越年闘争の
1月6日(水)まで
後援は...
- 1月4日(土) 炊き出し 午後1時
 - 1月5日(日) 炊き出し 夕方7時
 - 1月6日(水) 福祉社行進へ

新宿連絡会

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議

97年1月2日 第11期 NO22

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け ☎03(3876)7073

本部・新宿区西新宿1-1-1インフォメ前ダンポール村030(818)3450

越年斗争 9日最終日 弱い仲間を支える俺らの団結だ

1/6 (月) 福祉行動

あさ 8:30 西口地下
インフォメ会場
集合

越年の取り組みは仲間たちにとってどうだったろうか？この9日間、まだまだ未熟な点もあったけど俺たちは持てる力で精一杯やっ
たつもりだ。病人は多かったが、この越年中
新宿では仲間の死と出会うことはなかった。
連日炊き出しとパトロールをやり、医療テ
ン
ト体制を作り、集中アオカンで仲間を寝床を
作るという俺らの地道な活動が、年末年始の
仲間の命と暮らしを守る事に少しでもつな
がったとしたら幸いだ。共に越年闘争を担っ
てくれた仲間、本当にありがとう。そしてご苦
労さま。これから仕事へ行ったり、他の場所
に移ったり、生活保護をとったりしても、こ
の新宿西口地下広場でみんな頑張った越年
闘争のような仲間のつながりを作って行っ
て欲しい。「同じ仲間じゃないか、一緒にや
ろうよ」と明るく言える関係を俺たちはこれか
ら目指していきたい。

1/19 (日) 新宿あさ7時
インフォメ前集合
目録全編
総決起
集会へ

仲間うちの酒や暴力の問題など、俺たちが
かかえている深刻な問題も本越年では浮き彫
りにされた。日々、そういう暴力にさらされ
ている仲間がどうやってうまく過ごしてい
るのか俺たちは今まで以上に真剣に考えてい
かなければならないだろう。
東京都は28日の越年闘争妨害にみられるよ
う、追い出しの姿勢をこれから強めてくるだ
ろう。追い出しにまけない俺たち新宿野宿者
の強固な団結をいかに作っていけるかが大き
な鍵だ。これまでもそうだったが、奴等は突
然俺たちに襲ってくる。そういう時に動揺し
たり混乱したりしない仲間の団結の質が今、
本当に問われているのだと思う。困った時だ
けの団結だけじゃなく、敵に攻め上ぼって
くような団結の質だ。
そのためにもこれから共に考え、共に悩
み、共に行動しよう！明日の福祉行動から、
1. 19日履全協総決起集会、1. 24強制排除
一カ年新宿集会へ！

越年斗争
ラスト1/6 (月)
スリジュール
7時集合総決起
インフォメ前の
大掃除
8:30 出発
福祉行動
インフォメ前

新宿連絡会

新宿野宿労働者の
生活・就労保障を求める
連絡会議

97年1月5日 第11期 NO25

東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館 気付 ☎03 (3876) 7073
本部・新宿区西新宿1-1-1 インフォメ前ダンボール村 ☎030 (818) 3450

登壇後
本音アタック
終了

1・24新宿西口強制立ち退きから1年

「新宿ダンボール村のめざす未来」

1月24日、早稲田奉仕園小ホールで行われた集会の記録です。

パネラー：大島俊一（報道写真家）

笠井和明（新宿連絡会） 市崎和広（新宿連絡会）

パネラーの紹介

司会：今日はたくさん集まっていたので、この1年間、どうだったか、それから今日の題であります「ダンボール村の未来」ということでみんなで一緒に考えたいと思っています。どうか今日はみんな、想いを出し合える、一人一人が何かしゃべって帰る、という有意義な会にしたいと思いますので、どうかご協力をお願いします。（拍手）

それではまずパネラーの紹介からいきたいと思います。新宿連絡会の笠井さんです。笠井さんには、みんなが4号街路に住むようになって、4号街路にコミュニティができた、それが去年の1・24でつぶされた訳ですけど、その4号街路時代から1・24に至る、その「村作り」について話していただきたいと思います。

それから次に連絡会の市崎さんです。市崎さんには1・24以降、インフォメーションセンター前にダンボールハウスを作った時のこと、それから三建（東京都・第三建設事務所）による「大掃除」の時に、逆にダンボールハウスを作って仲間を増やすという活動をした時のことについて、その中心人物ですので、そういう話をさせていただく予定になっております。

最後にカメラマンの大島さんです。大島さんは世界各国のスラムなどを見ていらっしゃるの、そういう体験から「ダンボール村の未来」を語っていただきたいと思います。

（もう一人、新宿連絡会の古株メンバー、安藤さんをパネラーとして予定していましたが、体調が不調のため、議論に参加できませんでした。）

それで急なんですけど、今日はお客様がいらして、ちょっとご挨拶を一言いただきたい方がいらっしゃいます。1・24裁判のこちらの反証において様々な分野の学者の方や関係者の方に証人に出ていただいているのですが、その中で日本福祉大学の穂坂光彦先生にも証言をお願いいたしました。穂坂先生は「強制立ち退きは人権侵害である」とする国連人権委員会の決議を日本に紹介なさった方で、アジア居住政策論をご専門にしてらして、その立場から

非常に詳しいご証言をいただいたんです。そして今日は、タイのNGOで、スラムで活動していらっしゃるソムスックさんが偶然、ダンボール村を見たい、ということでダンボール村に見えて、集会の方にも来られました。それで時間の都合もあるということなので、先にご挨拶いただきたいと思えます。（拍手）

タイのスラムからのアピール
ソムスック（通訳：穂坂）：昨年の強制排除の1周年という重要な年に、突然なんですがお招きいただいて大変、光栄に思います。ここで皆さんがお集まりいただいているということは、強制排除後もますます皆さんが、ある種の連帯、団結の力を強めている、ということだと思えます。

私たちはアジアのいろんな国の路上やスラムに住む人々、および支援団体の間のネットワークを作っています（注：ソムスックさんはアジア居住権連合の事務局長）。アジアにはみなさんと同じ路上に住む、またはスラムに住む人々が非常にたくさんいらっしゃいますし、彼らが強制撤去を受けるという事態も非常に頻発しています。なんとかその人たちをつなぎながら解決策を見いだしたい、と思って活動しています。

と言いますのは、都市の特に貧しい人たちにとってバラバラでは弱いけれども、何らかの形でみんなで手をつないで団結すれば、解決が見える、みんなで自分たちの組織を強めるということが唯一の道である、と信じて活動をしているわけです。例えばタイですと、最近では橋のたもとに非常にたくさんの人たちが住んでいる。この人たちがお互い連絡を取り合って組織を作って、政府と交渉したりする。そういうことでようやく政府の側も住宅政策などが少しずつ変わってきている、ということがあります。

例えば私自身が関わっている事業の一つとして、橋のたもとに住んでいる、スラムに住んでいる人々の組織化を助けて、そこに自分たちのグループごとで貯蓄を始めていく。お金を貯めながらそれを元にしてお互いローンを始めていくと、そのうちグループとしての経済的な力がつい

てきて、だんだんと解決策を見いだしていく。そういうことをやっています。

最後に申し上げたいのは、皆さんがこれから孤独を感じたり、絶望感に陥ったりすることもあるかもしれませんが、しかし必ずどこかに同じような人々または、支える人々がいるんだということを記憶にとどめておいてください。そしてそういう力によって共に解決への道を見いだすことができると思っています。（拍手）

司会：どうもありがとうございました。それではパネルディスカッションに入りしたいと思います。それではまず笠井さんに4号街路の形成から1・24に至るまでを話していただきたいと思います。

4号街路コミュニティの形成

笠井：今日は「ダンボール村のめざす未来」というタイトルで、私の持ち分は4号街路のことをしゃべってくれ、ということで、4号街路の中に、これからの野宿を強いられた仲間のどういう未来が隠されていたのか、ということ、今の時点から振り返って考えてみたいと思えます。

1・24からちょうど1年というのですが、去年の1・24から前の半年くらいは、東京都の強制排除をめぐって一連の抗議行動を含め様々な闘いをやってきました。その中で、4号街路を守るんだと、仲間のコミュニティを守るんだと言って、結果として奪われてしまったということ、そういう意味で1年経ちますけれども、複雑な想いでいます。しかしながら今、現在、ダンボール村という形で仲間の団結、組織が残っているということに示されるように、わしらの希望は残っていると思えます。

4号街路の話ですが、そもそも新宿の取り組みが始まったのは、94年2月17日、東京都が強制排除したことに始まっています。当時の4号街路もダンボールハウスが立ち並ぶ状態だったんですけど、強制排除で4号街路のうち南側が一方的に封鎖されて、その南側に住んでいた人たちが排除以降、北側に移住する、というような格好で、4号街路

北側にダンボール村と言われるものが形成されました。あそこは柱番号のBの1番からBの60番までで百軒くらいしか並ばないのでちょうど百人くらいがそこに定住する、という形になりました。僕らの運動とか、新宿連絡会の活動を始めたころに、連絡会の母体である「新宿闘う仲間の会」のメンバーが4、5人集まって、Bの16から19番あたりを軸にして、あそこらへんに固まって仲間が暮らし始めて、またそれがあったから連絡会の活動家の部分もいつもそこにいる、というような形になって、そこがひとつ、新宿の取り組みの拠点になっていくという経過があります。

僕らが4号街路に入っていって、活動を始める以前から、仲間の間では、仕事や生活において、一緒に仕事に探しにいて飯場に行くとか、一緒に残飯を探すとかいう形でいろんな形の仲間のつながりがありました。そういうつながりをどうやって全体のものにしていくのか、というようなことを考えながら、いろんな活動をやってきました。いずれにしても一人で野宿するにはつらい、襲撃とかもあるし、こわいし、危険だし、孤独感もあります。その中でみんなが集団で生活していくというのは、ある意味で当たり前の形だと思いますが、どうしても小さなグループにまとまりやすくなってしまいます。小さなグループが小さすぎると、利害対立でグループ同士がぶつかり合うと、というようなことにもなってしまいます。これは94年の5月に「ホームレス連続殺人事件」というのがありまして、そういうグループを軸にした一つの固まりが結果として2人の仲間を殺してしまった、ということがありまして、これをきっかけに、どういうつながり、どういう団結を作っていくかなきゃならないのかと、自然発生的なグループがたくさんある中で、どうやって全体がうまくまとまっていけるような仲間のつながりを作れていけるのかと、いうようなことが一つの課題として考えさせられました。これがそれ以降の新宿連絡会の基調、「ヨコのつながり」とか「でっかい団結を作っていく」とかいうスローガンとして表現されていますけど、この殺人事件をきっかけにして、仲間のつながりがどういうふうにつながりうるのか、ということを考えてきました。

4号街路の北側にもそういうグループがいくつもありません。駅の方から、本屋さんのグループがあって、



仲間の会のグループがあって、それからまた本屋さんのグループがあってというようにいろいろあって、それから都庁寄りの最後にはまた仲間の会のグループがある、というようにいろんなグループが存在していました。グループといっても身体を拘束されるようなものではなくて、生活上の必要性に応じて作られたものなんですけど、それがどうして大きく一つにまとまりえたのか、というと、一つは強制撤去に対して新宿連絡会が、全体の居住地を守っていく、居住地を守っていくことは仲間の生活の基盤を守っていくことだ、というように全体の利益、というか仲間全体の問題を考えていこうとしたこと。具体的に行政に対して、個別のグループの利益ではなくて、例えば生活保護をきちんと出せ、であるとか、そういう仲間の生活とか仕事の要求を具体的な実践として起こしていく。特定の人たちに視線を置くのではなくて、仲間全体が野宿を強いられているということの問題として立てて、具体的な行動をみんなに呼びかけてやってきたと。というような中で、一定の信頼関係が生まれてきたんじゃないかと今、現在、総括的に考えて思います。

身近な問題に取り組むこと

それで4号街路の一番、おもしろいのは、いろんなグループがあって、そこでコミュニティと名付けたというの、掃除が最初なんです。みんなで共同で通路の掃除をします。そういうような中から、仲間の共同作業、そこに住んでいる仲間が自分らで通路をきれいにしていこうとい

うようなことをみんなでやり始めて、小さなグループが普段はお互い反目しあったりするんだけど、掃除とかする時はみんな仲良くするというような格好になりました。それで共同の掃除道具を置いてみたり、当時、ねずみがちょろちょろしていたので、ねずみ取りをあちこち置いてみたり、とか、蚊が発生するので通路を消毒したり、とか、そういう衛生面のことも含めてそういう日常的問題をやり始めて、それまで新宿連絡会に対しては、行政に対して要求ばかりしているとか、騒がしいことばかりしている、といったイメージも仲間の中にはあったんだけど、そういう身近な問題もみんなでやっていくような団体だと、次第に認知されてきたと思います。

確かにどういう団結を作っていくのか、ということで、わしらは常に「ヨコの団結」と言っているんですけど、実際問題、タテの関係が一番大きいです。それはある意味では仕方のない面があって、例えば殺人事件を起こした連中が特別違った人間だったか、ということ、そういうことはなくて、どこにもいるような仲間の形態だった、と思います。特に裏で暴力団がからんでいるというようなことではなくて、みんなと同じような経緯で野宿をせざるをえなくなった中で、具体的には加害者になった2人の仲間は元手配師であるとか、薦さんであるとか、タテの関係、親分・子分、関係を身に沁みて生きてきた人たちなんです。そういう人たちがすぐ急に、みんなを平等に、それぞれの生き方を認め合って、一緒に手を結ぶというようには、実際問題、なりにくい。どうしても親分

・子分の関係を作ってしまう、ということがあります。それをすぐさまどう、というのではなく、そういうタテの関係ではない、ということをも具体的、実践的に示していくこと。小さなグループの間に入って、みんなの問題として捉えるような、利害調整というか、例えばケンカをしていると中に入って止めるとか、そういう具体的なことを通して、タテの関係の人たちを排除するのはなくて、そういう人たちとも一緒にやっていたり、それをめざしていきたいと思えます。4号街路の時はそういうものができていたし、それが今後めざされていくべきものだと思います。

それで生活の問題では、物資、例えば毛布などを集めて、みんなに手渡していくとか、衛生面とか、ケンカを止めるとかいうように秩序もゆるやかに作ってきた。それと情報です。こういう世界ではデマが流れやすいので、きちっと行政がどういうサービスをしているのかとか、生活の正確な情報をビラにして配っていく。4号街路北側がみんな連絡会であった、というわけでは決してありません。ほとんど少数派でした。だけれどもそこで、いろんなつながりの中で、まとめたというつもりはないんだけど、なんとなくまとまっちゃったと。もし全員を「仲間の会」にしようとかしていたら、お互い反目しあって目茶苦茶になってしまった、と思えますけれども。そういう形を取らなかったということが、いわゆる「4号街路コミュニティ」と言われたものの中身なんじゃないかと思っています。(拍手)

司会：どうもありがとうございます。では次に市崎さんから、1・24以降の小屋作り、最近のダンボール村についてお願いします。(拍手、「がんばれよ!」の声あり、)

すべての仲間に小屋を!

市崎：私は4号街路にも短い間、いたんですけど、強制排除、1・24を間近に控えた時に、結構、マスコミの人がたくさん来て、聴くんですね。「なぜここにいるんですか?」と。自分は結構、あそこにいた人の中では若かったからね。それで4号街路に入った時、思ったのは、意外とダンボール困っている仲間は年配の人が多いいですよ。だからこんなこと(強制撤去)やらしたら、大変なことになるぞ。まずそう思って、自分らが何かしなきゃ、とんでもないことが起きるな、とその時、思い

ました。それで撤去以降、労働者がみんな高校生だとかに襲撃を受けて…。そういう事件が起きるなあ、というのは4号街路に入った時にだいたい予想はしていました。

自分は4号街路でなんとかしなくちゃならん、と思って、運動に参加して、現在もそういう形でみんなと一緒に運動しているんです。4号街路で小屋を奪われた仲間は、みんなで作ったつながりを、行政だとか警察だとかに引き裂かれちゃいましたが、現在、また、元いた仲間が西口の地下に戻ってきています。それで自分たちは、その人が4号街路にいた、いないを問わず、とにかく生活する場所がない仲間には、無条件で小屋を作ったり、生活できるように、とりあえず寝る所を作るようにしています。そういう自分らがやったことを、集団を引き裂こうとする目論見が、去年は2回あったのかな。8月と12月の三建による「清掃」ですね。結局、私らは、「清掃には協力する。だけれども撤去をするのだったら協力はしない。」。そういうのでやって、8月は最初のうちはワイワイガヤガヤやって、12月は(三建側が)最初はおとなしかったけど最後の方で一閃着あって、それもみんなの生活を守るためになんとかやって、それで気持ちいいまま越冬に入ろうとしたら、越年の初日(12月28日)、また機動隊が来て、三建が来て、越冬に圧力をかけ、妨害しようとする。それもみんなの寝るところの問題も生活の問題もあるから、そういう仲間のためにも妨害を阻止しなければならぬ、ということでもなんとか切り抜けました。

それで現在も冬の時期で、それも一番寒い時期で、寝るところがない、厳しい仲間が地下に下りてきています。だから今は、そういう仲間には無条件で優先的に小屋を作る。昼間は疲れて寝ている仲間が多いので、夜だとか昼間の空いている時間を利用して、ダンボールを集めて、小屋を作って、仲間にあげて、そして空いた小屋は小屋の欲しい仲間自由に使ってもらえるようにして、という形でやっています。小屋のある仲間はいいんだけど、場所の問題もあるし…。パトロールなんかに行っても、場所がなくて風の厳しい地上なんかで寝ている仲間に会います。そういう具合の悪い仲間から暖かい場所で寝られるように、施設なんかに入れるようにみんなで支えています。地下に作る場所は限界があるので、全部が全部そういう形にもい

かないのですが、今後、一人でも多くの仲間場所に与えられるように、と思ってやっています。(拍手)

司会：では最後に大島さんにアジアのスラムの話をお願いします。

どこの国でも「不法占拠」

大島：新宿のダンボール村とアジアのスラムとでは、スラムには家族生活があったり、仕事に出てったりという形で新宿とはちょっとは違うかもしれませんが、やはり共通している問題がありまして、そこらへんのことを話したいと思います。

だいたいどこの国でもスラムの形成というのは、公共の土地とか、空き地、河川敷、湿地帯など通常では家が建たないところに木の杭を打ったり、線路際のぎりぎり汽車との2メートル位の幅に家を建てたり、という形で、だいたいもともとは何かの名目があるところに人が集まって建てられているというのがほとんどです。基本的に他に使い道がない空き地になっている場所、そこにいても撤去される可能性が小さい場所、そしてなおかつ仕事に行くことが可能な場所。つまりいくら場所があっても仕事に行く場所が遠ければ、人間は寝ているだけでは何もできないので、だいたい基本的には大きな街の真ん中に作られることがほとんどになります。

カンボジアの場合には、戦争で地雷が埋まってしまって田舎で働けなくなった人たちが、プノンペン市内に出てきて、やはり駅の裏の敷地内ですね、焼けた汽車なんかを並んでるんですけど、その中に住み着いたり、あとは線路際と沼の間にある場所に、雨期になると沼になってしまう場所なんですが、柱を何本か打ちつけて、その柱の上に板を敷いて家にする、そういう形ですね。後は鉄道のコンテナを使ったり。タイのバンコクにあるスラムでも、広いところではクロントイというタイで一番大きい港があるんですけども、そこに行くのと港の荷下ろしの仕事があるということと、同様に港湾局の周りが大きな湿地帯になっていたんですね。そこに柱を打って住み着く。もう一つは港に引き込み線になっていく汽車の線路際に腐材で家を建てていくと。

タイでは今、スラムというのは千箇所を越えると言われていて、タイ国の人口の2割の人がそこに住んでいると言われてます。だいたいそこでは基本的に高速道路ができた橋桁の

下とか、汽車の線路際、あとは湿地帯になってただの原っぱになっているところが使われています。カンボジアでもそうです。ベトナムなんかでも、サイゴンの真ん中にサイゴン川が流れているんですけど、そこに支流の小さい川に、両脇に杭を建てて住み着いている、というのがほとんどです。

どこの国でもそうなんですけど、マニラでもスモーカーマウンテンというゴミ捨て場があったんですけど、そこもゴミ捨て場として他に利用価値がなかったものですから、ゴミの上に家をたくさん作る人が出てきて、街が形成されました。どこの国でもスラムというのは、許された土地で家を建てているという人はほとんどありません。ほとんど不法占拠です。ですから必ず撤去問題というのは、常にあって、どこの国の人たちも追い出される心配を持っています。ただ自分一人でしたら、元々の土地の所有者たちとか、汚いという理由で排除されることもあるのですが、それから身を守るために住民同士が組織を作って、その土地の持ち主、国とかに交渉を申し入れて、補償なしの撤去はするな、ということをお願いしたいどこの国の運動もしています。

都市の再開発、その土地に何か新しいものを作るとか、港を広げるとか、そういうことになると必ず立ち退き問題が出てきます。その時にもともとの権利というのはないわけですから、補償もなしに出ていかそうとする行政の側と住民が大きなぶつかり合いをして、暴動になることもなんかもあります。

その場合、身を守るのは、どうしてもそこに一緒に住んでいる人たちが「たとえ自分たちの土地ではなくても、我々はそこに生活している。生活を守れ！」ということで粘り強い交渉を続けていく。それなしでは自分たちの家や生活は保たれることはありません。

日本で4号街路の撤去の時は、要するに道路なんだから作っちゃいけない、道だとか公園だからダンボールハウスを建ててはいけない、というわけですが、日本にそもそもダンボールハウスを建ててよい場所などというのは存在しようがないし、そういう場所を高い日本の中で確保できない経済状況の人たちが家に住めなくなって出てくるわけです。ですから、どこの国でも貧しい人たちというのは不法占拠をしています。それは必ずしも撤去にあうかという、撤去しようとする行政に対し、自分

たちの住民委員会を作って交渉することによって、強制撤去を回避しています。だいたいスラムの中の住民委員会というのは、スラムの住民たちとそこに住民たちをサポートしようとするボランティア、さらに仕事を通して作られた労働組合などが中心となって、行政やその国の社会に呼びかけるような形になります。そういう取り組みの中で、知識人とか、行政の中でも耳を傾けようという人も巻き込んで、一つの社会問題化することによって自分たちの生活を守ろうとします。

バンコクで最大のスラムと言われるクロントイでは、そこで生まれた女性の方が、そのスラムの状態を改善するためには、まず教育ということで、子どもたちのための学校を作ることから始めました。学校を作る中で、スラム問題を取り組み、住民委員会を作り、住民同士のヨコの交流を作って、行政と交渉する。そういうことを通して、不法占拠である家を守ることに成功しています。

生活全部を守る活動

それとスラムの中に住民委員会という形で、家を守ることも他にも生活の上での様々な問題を解決する機能を作ることを、だいたいどこの国のスラムでも努力しています。例えばスラムの人たちというのは、肉体労働をする人が多いのですが、もちろん低賃金ですし、労働条件が悪い。日雇いで、就労保障のない職場で働いている人がほとんどです。そういうところで低賃金、賃金不払い、突然の解雇といったものに対しても、スラムの住民の組合が取り組みます。強制撤去以外の問題も生活の様々な面を取り扱う上で、自分たちの団結

を強め、生活全部を守るという運動に発展しています。

どこの国でも、貧しいところで仕事がないというのが多いのですが、仕事を探すと肉体労働であるとか、あるいは仕事がない中で、合法的でない仕事、例えば麻薬であるとかシンナーを売ったりとか、またはピンハネのはげしい手配師のような仕事もどうしてもスラムの中で発生することになります。こういう仕事を通して、だいたい力のある人間が自分たちの暴力的なグループを強め、スラムの中での力による支配を強めようとします。またお酒を飲んだり、麻薬を吸ったりと、仕事がなくで時間を余す中で、どうしてもそういうことに走りがちだということがあります。そういった時にそれを商売にするタテの関係というのが必ず発生するんですが、住民委員会のヨコのつながりと、そういう暴力グループのタテの関係というのが必ず相互にからみあっていて、一人ずつの生活を考える際に新宿でもそうなんですけど、暴力支配とどう闘っていくのか、というのがもう一つの問題として出てきます。

その暴力支配の中に、日々のお金を得る仕事を組み込まれることによって、ヤクザに頭が上がらないとか、何か不払いとかがあっても泣き寝入りしてしまう、というのは、新宿のダンボール村と同じだと思います。それをどうするか、というのはそうした暴力支配に対してヨコのつながりを強くして、自分たちの身を守る。強制退去から身を守るのと一緒に、自分たちの生活手段を手に入れる。この2つがないとどうしても人間は生きていくことができないわけです。この2つの問題を頭に入れながらヨ



このつながりを作っていく限り、ただ場所だけが確保されていても自分たちの生活を自律的に作っていくということはできないと思います。(拍手)

克服すべき課題と提案

【3人のパネラーのお話を受け、質疑応答と全体での議論が行われました。その中では以下のような様々な点について討議がなされました。】

・条件の違う中で野宿を強いられている仲間(例えば新宿でも地下と地上)の間で、コミュニケーションを作り、つながりを作っていくことは難しい。

・家のない人が空いた所に家を作ることは正当に評価すべき。でもそれからどういう生活をするかということが問われてくる。

・炊き出しや寄り合いなどの日常活動をどうやって新しい仲間にもまで広げていくか。初めて来た人が「入りづらい」と思うのをどうやって克服していくか。

・仲間うちでも「仕事をしてない奴はダメだ」という形で世の中の価値基準を持ち込み、序列を作ってしまう。それを乗り越えられるヨコつながりをどう作っていくか。

【新宿や山谷の仲間からは、「なかなか仲間の輪が広がらない」ということについて悲観的な意見も出ましたが、一方で撤去後もダンボール村を再建し、仲間の団結を維持し続けていること自体が素晴らしいことだ、という意見も出ました。また各地での取り組みの紹介もなされ、渋谷からは、分断された状況の中でも寄り合いを始め、仲間のつながりを作ろうとしていること、山谷からは上野や隅田川沿いの仲間ともパトロールを通じて結びつき、炊き出しで使う野菜を作るために自分たちで畑を借りる計画もあることが紹介されました。新宿の仲間からは、ダンボールハウスの高層化(!)の構想や、仕事を自分たちで作っていくこと、アルコール依存症など仲間の健康問題に取り組んでいくことなど、仲間が抱える様々な問題を解決していくための積極的な提起がなされました。そして最後に各パネラーから「ダンボール村の未来」について総括的な発言がありました。】

歴史のうねりの中で

笠井：未来は、あるはずですよ。(笑) 3年間、がんばってきました。これからがんばる力はあると確信して

おります。新宿の闘いは単に住処を守るというだけではなく、生活を守っていくという大きな視点で進めてきて、今、現在、ダンボール村があるということだけで勝利し続けていると思います。今、やることのないからということでは無気力になるのではなくて、今、現在、東京のど真ん中、新宿の一等地にあれだけの数のダンボールハウスがあって、なおかつ増えつつある、しかも高層化の話まである(笑)、ということは底辺・下層の闘いの中では特筆すべきことであろうし、大島さんの話の中にあつたように諸外国では当たり前のようになされている闘いが日本でも取り込まれている、という意味で、国際的な性質も持ちうるのではないかと、と思います。「不法占拠状態を維持、発展させよう」と書いたこともありましたが、その発展の経路を、今あるダンボール村だけではなく、他にもどう考えられるか、ということだと思っております。

仲間うちの問題についても、どうしても閉鎖的になってしまうので、どうやって仲間全体の問題として克服していくのか、というのをテーマにしながら、一方で大きな歴史のうねりの中で自分たちをきちんと位置づけながら、「ホームレス」と言われ、社会の中で足蹴にされている存在ながらも同じ人間、同じ労働者として生きる権利があるんや、という当たり前前の闘いをやってきた。それが一つの流れになっているということに確信を置いて進んでいきたいと思っております。

自分らで仕事を作っていくという提起がありました。その観点は必要だと思います。具体性は全然ありません(笑)。行政に対して要求していくという観点でやってきて、それはそれで必要だと思いますが、逆に言えば行政から金だけ引き出して、てめえらでやる、という考え方がこれから必要になってくると思っております。それは仕事に限らず生活保障の面でもあると思っております。そういう観点にどう具体性を持たせられるか、というのが大事になってくると思っておりますので、これからみんなで論議しながらやっていきたいと思っております。

仕事についての提案

市崎：仲間で作ってみんなでやる、という話があって、そういう形ができれば良いと思うけど、ちょっと難しいと思うんだよ。だからそれに近い形というか、仕事行った仲間が、行った先でもうちょっと

人を入れられないとか、仕事を仲間ですりあつたりとか、そういう形ならできると思うんだよ。そういう形でみんなが、うまいこと仕事ができるようにできればいいと思います。去年の4月頃、自分が地下から2人連れて行って、そういう形にしたことがあるんだよ。その時は長く行っていない人間が「やっぱり長くしてないと体が持たんよ」と言って、2人しか行かなかったんだけど。だから仕事をやりたい仲間、できる仲間がいれば、そういう形で回していきたいと思います。

自分たちで「張り」を作る

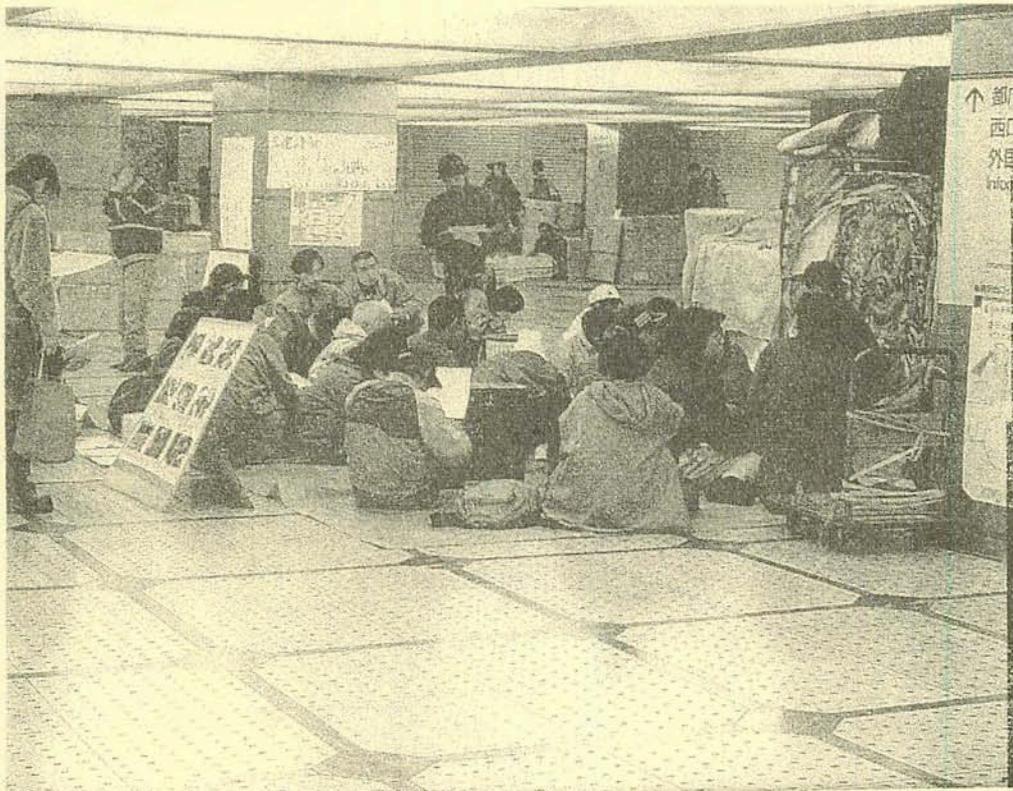
大島：アルコールの問題なんですけど、どうしても寒い、とか、ダンボールハウスに寝ていると周りの音とかの緊張から気を休めたくて酒を飲むということはあると思うんです。サラリーマンでも仕事が終わったら酒を飲むし、酒飲むこと自体は悪いことでも何でもないと思う。ただ、やっぱり体力が落ちていることと、仕事つけないことの裏返しで時間があることが、長い時間、飲んでいくと。長い時間飲んでも、例えば飯場で仕事の後、酒飲んでもぐてんぐてんにはならないですよ。人間はどうしても気力が落ちてきて、仕事とか何かをやっているという支えがなくなると、すごく元気もなくなるし、体調もおかしくなる。そういう時に飲むと同じ量飲んでも、悪い酔い方をしてしまう。それが余計、自分自身を追いつんでいってしまうと。自分の存在をアピールできない時に飲むとどんどん悪い方向になって、本人自身にもダメージを与えてしまうと思っております。こういうのを何とかするためには、例えば共同で仕事を作るなりして自分たちがやっていく「張り」というものをみんなの中で生み出していくことで新しい道へ踏み出せるのではないかと気がします。

司会：ありがとうございます。今日は1・24から1周年ということで、本当にこの3年間、踏まれても踏まれてもよくやって来た。ダンボール村でがんばることで、みんな明るい顔して、社会に向かってこうやって生きていこうと言っている。また、ダンボール村の高層化の話や他に村を作ろうという話も出ました。排除的になりがちであるとか、タテの関係の問題といった自分たちの問題も捉え返しながらも、未来をしっかりと語れたと思います。今日は遅くまでどうもありがとうございました。

(文責・編集部)

新宿のホームレス 相次ぐ死亡

ボランティアら 自主パトロール



新宿駅西口で開いた連絡会の会合。越冬への不安を訴えるホームレスが少なくなかった

「次はおれの番かもしれんか」「都に追い出されんか」。冬の気配が目につく。不安を抱えるホームレスの人々とボランティアが手を組んで、自主的パトロールを行い、越冬への不安を訴えるホームレスが相次いで死亡した。「越冬できなかった」「おい、人が死んでいる」。

「この冬おれも危ないと思う」

「おれは、ホームレスで、日間、西口地下を清掃する。約二十人とボランティア約十人でつくる『新宿野宿労働者の生活・就労保障を求め連絡会議の事務局員。週三、四日、西口地下に泊まり込む。』」

新宿区福祉事務所によると、十一月中旬、西口地下のダンボールの中で死んでいる男性が見つかった。さらに同月下旬、近くで死んでいる男性が発見され、集まった約四十人の仲間呼びかけ先の病院で死亡。十二月二日にも、同所で倒れ病院に搬送された男性が翌日死亡した。

「具合は…」声かけ 健康把握 心温かく

十一月三十日午前五時、新宿駅西口地下のダンボールの中で寝ていた笹井和明さん(58)は、ホームレスの男性に起こされた。「またか。寒さで震えながら、また入通りの少ない西口地下の現場にかけつけると、小柄な五、六十代の男性が冷たくなっていて、ホームレスの目撃者から、男性は前日から酒を飲み、めいていて状態が危ない」と初老の女性。都は十二日から三

「この冬は、おれも危ないと思う」と、西口のダンボール小屋で暮らす上野安正さん(51)。四年前にホームレスになった。右目が見えず、足も痛く仕事に就けない。大分県出身の上野さんは両親の顔を知らず、身寄りがない。「ビルの谷間で死んでも、だれにも思いついてもらえない」と訴える。二十三日と都はホームレスなどの越冬対策として、今月中旬に新宿区内に八十八人収容の宿泊施設を、一月中旬に大田区内に三百人収容の宿泊施設を開設する。施設は去年と同規模だ。

(大田 康夫記者)

嵐は大樹をつくる

— '96～'97 新宿越年越冬闘争の記録 —

発行：1997年3月1日

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議

頒価：500円

連絡先：東京都台東区日本堤 1-25-11

山谷労働者福祉会館気付

☎03(3876)7073/FAX03(3876)1869

東京都新宿区西新宿 1-1-1

新宿西口インフォメーションセンター 前 タンポポル村

郵便振替口座 00170-1-723682 「新宿連絡会」